

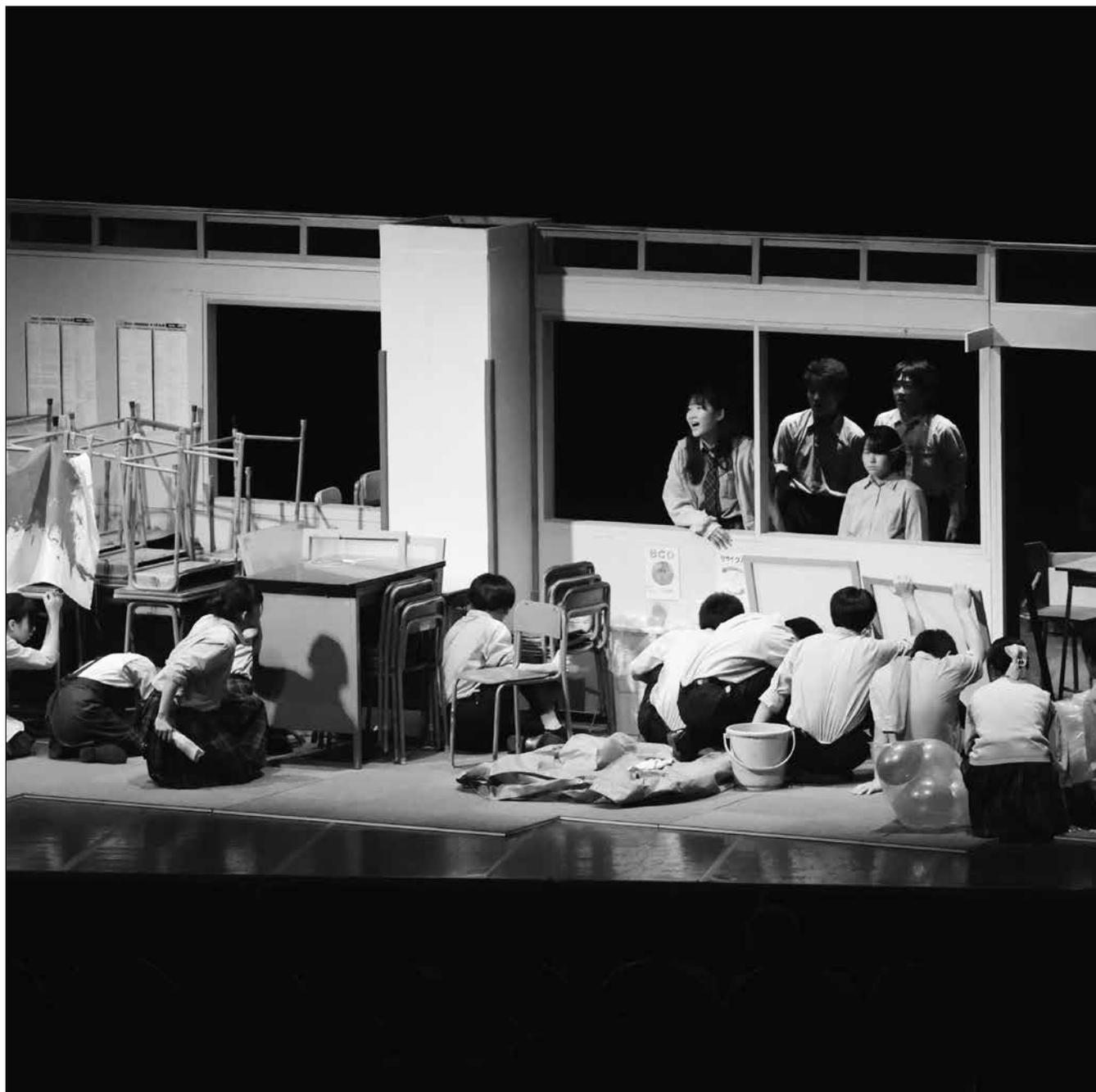
# 演劇創造

復刊

第151号

(第59卷第2号)

令和7年(2025年)



— 発行 全国高等学校演劇協議会 —

〒732-0068 広島県広島市東区牛田新町1丁目1-1 広島市立広島商業高等学校 TEL 082-228-2481 FAX 082-222-0869

事務局長 黒瀬 貴之

ホームページ <http://koenkyo.org/> メール [info@koenkyo.main.jp](mailto:info@koenkyo.main.jp)

## 第70回全国高等学校演劇大会(岐阜大会) 審査の経緯

第70回全国高等学校演劇大会は、文化美術活動と生涯学習の中核施設として開館された不二羽島文化センターを会場として令和6年7月31日(水)から8月2日(金)の日程で開催された。

今大会の専門審査員は、THEATRE MOMENTS主宰・演出家・俳優・ワークショップファシリテーターで、日本演出者協会国際部部長としてご活躍されている佐川大輔先生。文学座に所属され、俳優・劇作家として文学座の舞台を中心に活躍されている瀬戸口郁先生。舞台美術家の島川とおる氏や美術家、建築家のオクタヴィアン・ネクライ氏に師事し、舞台装置、舞台衣装のプランナーとしてご活躍されている佐々波雅子先生。桐朋学園芸術短期大学学長、アジア演劇教育研究センター副理事長で演出家である越光照文先生の4名に担当していただいた。

また、顧問審査員としては北海道ブロックから北海道余市紅志高等学校の千葉和代先生、関東ブロックから静岡理科大学星陵中学高等学校の原田一雄先生、中国ブロックから光高等学校の石田千晶先生と、演劇部顧問として全国大会に出場経験がおりになり、高校演劇への造詣の深い3名の先生方をお願いした。

審査については、大会1日目の上演終了後から毎日、事前審査会を行う。また、各校の上演後のわずかな休憩時間にも審査員室で活発な意見交換が行われる。このような話し合いを経て、3日目の審査会では、まず、優秀賞以上の4校を決める投票を行った。審査員一人あたり4校に丸をつけて、結果を集計し、それを元に最優秀賞を1校、優秀賞3校を決める。集計の結果、票数の多かった上位4校については城東高校が7票と満票、青森中央高校が6票、長良高校と宮崎南高校が4票、下関中等が3票、伊集院高校と帯広三条高校が2票であった。この結果、最優秀賞の候補として城東高校と青森中央高校の2校で意見交換がされた。単純な得票数によらず、それぞれの先生から評価のポイントについて丁寧かつ活発な意見交換がなされた。青森中央高校については演出において大変評価できる上、描く世界の芸術としての到達をみせ、新たな創作方法の提示にもなったと評価された。城東高校については、観るものの想像を大きく刺激し、時代性、迫真性をみせ、一つの衝撃をみせたと評価された。様々に意見交換がされたが最終的には、新規性創作性の高さを評価され、僅差であったが城東高校が最優秀賞に選ばれた。優秀賞の3校については、スムーズに意見がまとまり、前述の青森中央高校、補講をうける演劇部と先生という設定と会場が全体を引き込んだ宮崎南高校、演劇的手法を随所に駆使し3つの時代を描くアンサンブルに優れた長良高校に決まった。

次に創作脚本賞は、読み物として優れており、人間の結びつきを丁寧に描き、「ひっくり返せ」という台詞がエールと感じられた、上田美和作『仕事のお父ちゃん』が受賞した。

舞台美術賞は、登場人物を際立たせる空間の捉え方や細部へのこだわりが見える舞台づくりに対して高く評価された松戸高校が受賞した。

今後の演劇活動が期待され、高校演劇の指針となるような学校に授与される内木文英賞は、生徒創作であり、これからの高校演劇の活動の指針となり得る作品であると評価が高かった下関中等が受賞した。

最優秀校に授与される東京演劇大学連盟賞は、副賞としてワークショップ講師が派遣される予定である。ぜひ地区の演劇活動の活性化につなげてほしい。

審査会に立ち会い、とても印象的だったのは、審査員の先生方が真摯に作品に向き合い、その作品に込められた努力をくみ取るために全力を尽くしている姿だった。酷暑が続くなかで、全国各地から集まった演劇部の熱、観客の熱、大会運営を担う岐阜県の事務局の先生方の熱、いたるところに情熱があふれる大会となった。全体的にバラエティに富んでいてレベルも高く、甲乙つけがたい大会だった。

また、高校生が伝えようとするものが随所にあった。人間を描き人生へのエールを届けたもの、大人では気

づけられないような家族や友人関係の問題、多様性をめぐる葛藤や苦悩。学校という舞台のなかでのいじめや貧困、パワーハラスメント、搾取されてしまう存在であること、家庭内暴力や不治の病。戦争が間近にあるという社会の危うさ。衝撃を受ける作品ばかりだった。スタッフワークについても、観客に感動を与えたいという思いが感じられ、それぞれの世界に引き込まれた。大会を通じて演劇の魅力を味わうことが十分にでき、演劇の楽しさを噛みしめた3日間であった。今大会は、全国大会が47都道府県を一回りし、2周目の始まりの大会であった。来年は第71回目。香川県のサンポートホール高松で開催される。

**【最優秀賞（文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞・東京演劇大学連盟賞）】**

徳島県立城東高等学校 よしだあきひろ／作  
『その50分』

**【優秀賞（文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞）】**  
(上演順)

岐阜県立長良高等学校 西野勇仁／作  
『星観る者ども』

宮崎県立宮崎南高等学校  
河原美那子と宮崎南高校演劇部／作  
『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

青森県立青森中央高等学校 畑澤聖悟／作  
『駈込み訴え』

**【優良賞（全国高等学校演劇協議会会長賞）】**(上演順)

鹿児島県立伊集院高等学校 上田美和／作  
『仕事のお父ちゃん』

山口県立下関中等教育学校 溝口歩美果／作  
『レベル1の勇者』

北海道帯広三条高等学校 井出英次／作

『つぶあんとチーズ』

高田高等学校 西尾優／作

『色々々々々々々』

千葉県立松戸高等学校 阿部順／作

『私達の、小さな物語。』

兵庫県立東播磨工業高等学校 藪博昌／作

『廻る』

目黒日本大学中学校高等学校

めぐにち演劇部と今井友也／作

『ごめんね、ごめん！』

東京都千早高等学校 櫻井ひなた・奥村奈美／作

『ちんぷんかんぷんぷん』

**【創作脚本賞】**

上田美和 『仕事のお父ちゃん』

**【舞台美術賞】**

千葉県立松戸高等学校 『私達の、小さな物語。』

**【内木文英賞】** 山口県立下関中等教育学校

**【審査員特別賞（演出賞）】** 徳島県立城東高等学校

## 第70回 全国高等学校演劇大会 審査集計表

日付	番号	ブロック	学校名	演目名	佐川	瀬戸口	佐々波	越光	千葉	原田	石田	計	賞	
7月31日 (水)	1	九州	鹿児島県立伊集院高等学校	仕事のお父ちゃん	○		○					2	優良	
	2	中国	山口県立下関中等教育学校	レベル1の勇者	○		○				○	3	優良	
	3	北海道	北海道帯広三条高等学校	つぶあんとチーズ					○	○		2	優良	
	4	開催県	岐阜県立長良高等学校	星観る者ども		○	○	○			○	4	優秀	
	5	中部日本	高田高等学校	色々々々々々々										優良
8月1日 (木)	6	九州	宮崎県立宮崎南高等学校	学校の片隅で、数式を叫ぶ		○		○	○	○		4	優良	
	7	関東	千葉県立松戸高等学校	私達の、小さな物語。										優良
	8	東北	青森県立青森中央高等学校	駈込み訴え	○	○		○	○	○	○	6	優秀	
	9	近畿	兵庫県立東播磨工業高等学校	廻る										優良
	10	関東	目黒日本大学中学校高等学校	ごめんね、ごめん！										優良
8月2日 (金)	11	四国	徳島県立城東高等学校	その50分	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀	
	12	関東	東京都千早高等学校	ちんぷんかんぷんぷん										優良



鹿児島県立伊集院高等学校



山口県立下関中等教育学校



北海道帯広三条高等学校



岐阜県立長良高等学校



高田高等学校



宮崎県立宮崎南高等学校



千葉県立松戸高等学校



青森県立青森中央高等学校



兵庫県立東播工業高等学校



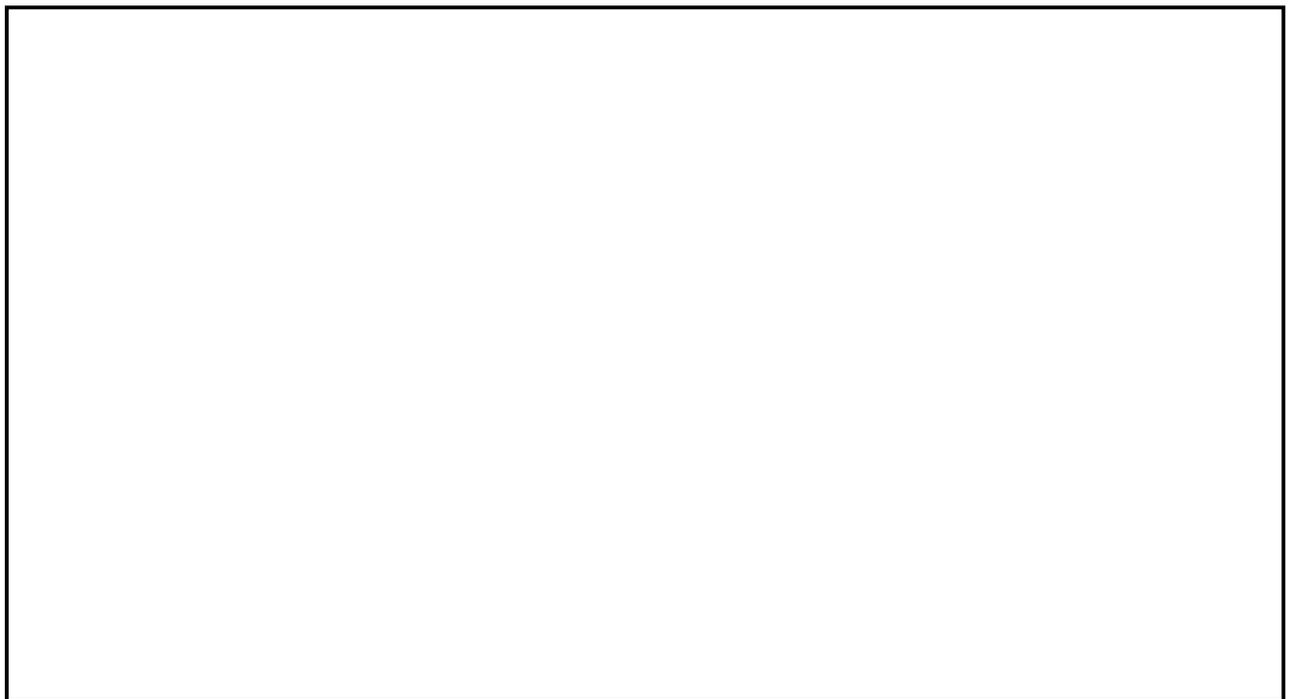
目黒日本大学中学校高等学校



徳島県立城東高等学校



東京都千早高等学校



## 2巡目が始まりました

西野 勇仁

第70回全国高等学校演劇大会（岐阜大会）・第70回全国高等学校演劇指導者講習会・第48回全国高等学校総合文化祭演劇部門は、令和6（2024）年7月31日（水）から8月2日（金）、岐阜県羽島市にある不二羽島文化センターにて開催されました。

はじめに、関係する多くの皆様のおかげで本大会が無事に開催されましたことに対し、心より御礼申し上げます。一次予約が開始された初日にチケットが完売し、二次予約も開始2分で完売、三次予約に至っては開始1分たらずに完売…といった事実で象徴されるように、高校演劇を愛する多くの人に支えられた大会でした。運営マニュアルすら配らない私の杜撰さによって、会場入りしてから諸々決めるようなグダグダな運営でしたが、観客及び役員の方々のあたたかさ、岐阜県の実行委員会の底力のおかげで、何とか無事終わることが出来ました。

岐阜県は、昔からずっと生徒実行委員会が大会を運営しており、生徒が何でもやります。照明音響の仕込みはもちろん、パッチ表も生徒が作りますし、出場校打合せも生徒が大部分を担います。県大会プログラムをめくると、大会理念として「コンクール主義を排する」が一番上に掲げられています。

先催県の視察を重ねても運営方法と方針が根本的に違い過ぎて、例年通りの全国大会を目指してミスなくキッチリやろうとしても絶対にどこかでボロが出ると考えました。そこで目指したのが、「変な大会」でした。しっかりしていたらミスが目立つけれど、最初から変なら許されるかもしれないという姑息な算段です。

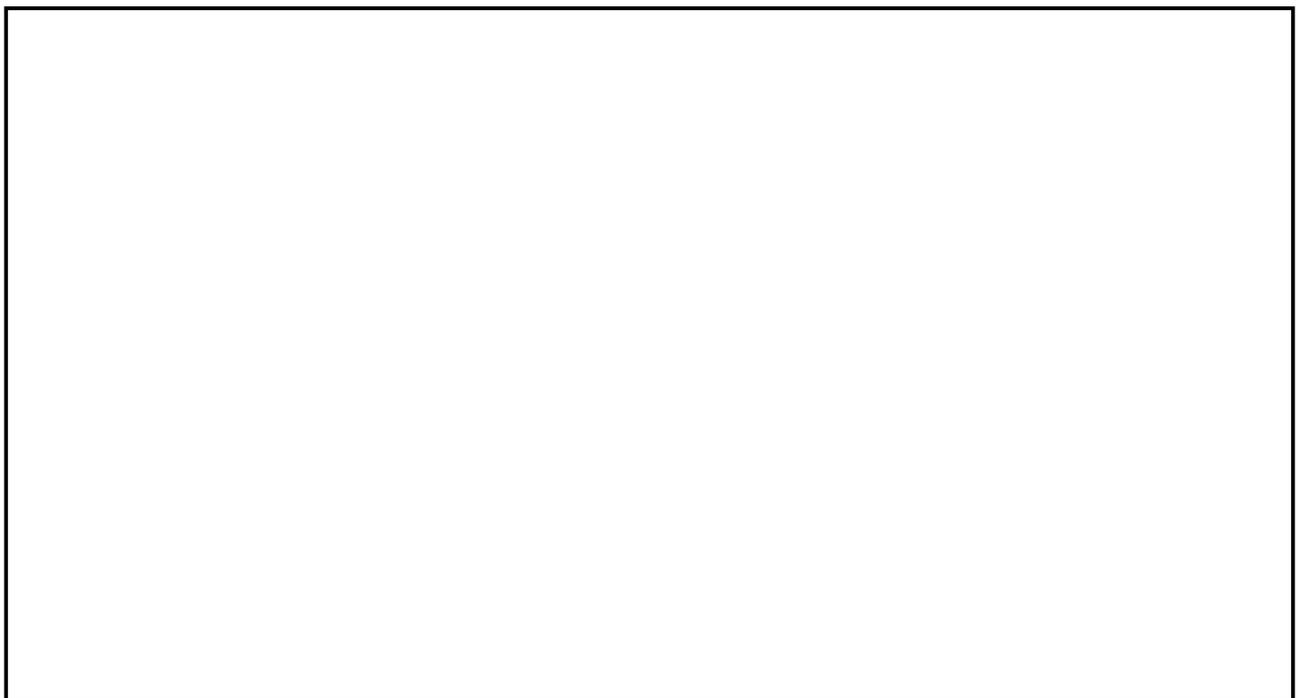
各校の上演前には前説があり、生徒講評会場は豪華に飾り付ける、感想ボードの横には「質問ボード」を置き、会館内では岐阜農林のアイスを販売、そして青春の象徴としてカルピスが無料配布される…。枕詞のように言われ続けた「2巡目のトップバッター」という言葉を、プレッシャーではなく免罪符のように都合よく解釈し、「トップバッターだから許される」を合言葉に、随分好き勝手してきました。諸々すみませんでした…!

とは言え、トップバッターとして無茶するにあたり、歴史と伝統を知らないのは罪深いと考え、大会の歴史を辿ってみました。この全国大会、「指導者講習会」から始まり、全国各地から集まる、演劇を愛好する仲間同士の交流の場としてスタートしたようです。

だから、この演劇創造を読んでいるであろう顧問の先生方、そして生徒の皆さんのことを、なるべく仲間だと思って接するように努めました。会場入りしてすぐ、運営生徒に対して話しました。「上演校はお客さんじゃありません。仲間です。」「役員の先生方は来賓じゃありません。仲間です。」「一般のお客さんも、演劇を愛する仲間です。」

こんな若造がすみません。ただ、本当に良い仲間恵まれたと思います。ありがとうございました。2巡目、無事に始まりました。来年の香川大会の大成功を、心よりお祈り申し上げます。

（第48回全国高等学校総合文化祭演劇部門 代表委員）



## 「お礼のことば」

堀江 佑太郎

第70回という節目の全国高等学校演劇大会、そして全国47都道府県を回ってきた総文祭の二巡目トップバッターとなった今大会を無事に開催することができ、ほっと胸をなでおろしています。

先催県を視察して感じたのは、全国から高校演劇を愛する人たちが集まることのすばらしさと、それを受け入れる実行委員の皆さんの温かさでした。そんな大会を岐阜で開催できる喜びと共に、実行委員会が始まりました。岐阜地区では元々、生徒実行委員会が存在しており、以前から生徒が中心となって大会運営に携わってきました。ただ全国大会では、自分たちのやり方を押し付けることなく、他のブロックとの文化の違いをよく自覚し、柔軟におもてなしができるよう、努めました。

私たちは「楽しむ」ことを大切にしてきました。そうして迎えた大会。開場待ちの列が何重にも連なるほど、多くのお客様にご来場していただきました。埋め尽くされた客席を見た瞬間、本当に幸せだと感じました。何よりも忘れられないのは、上演終了後、多くの方が作品について語り合ったり、生徒講評に耳を傾けたりしていた姿です。高校演劇を愛する人たちが集まる全国大会だからこそ見られる光景に感動し、また、その瞬間を共有できたことが実行委員として、本当にうれしかったです。

大会閉幕までは、まさに旅のようで、楽しい時間はあっという間に過ぎ去っていきました。いざ終わってしまうと寂しく思いますが、今大会が無事に閉幕できたのは、実行委員や先生方のお力添えがあってこそだと思います。本当にありがとうございました。そして、来年のかがわ総文の成功を心よりお祈り申し上げます。

最後になりますが、全国からお越しいただいたお客様、上演校の皆様、不二羽島文化センターのスタッフの皆様、今大会に関わったすべての方々に改めて感謝をし、お礼の言葉とさせていただきます。最高の時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

(演劇部門生徒実行委員会委員長 岐阜県立長良高等学校 3年)

## 「生徒講評の奥ゆかしさ」

上松 芹奈

今回私は、生徒講評委員長を務めさせて頂きました。生徒講評では、劇を観て自分が感じたもの、受け取ったものなどを自分の持つ語彙で伝えなければならず、すごく苦労しました。しかし少ない語彙の中からも、湧き出る感情を伝える楽しさや魅力を知りました。はっきりと感じたことを言える時もありますが、「この気持ちはどこから湧いてくるものなのだろうか。」そんなモヤモヤとした感情ももちろんあります。それを言葉にすることはとても困難で、「何としても自分の言葉で伝えたい!」という気持ちで挑みますが、なかなか上手く行きません。

しかし、むしろそういう所が楽しいのです。その感情がどこから来たのか、なぜそう感じたのかを探究したり、その意見を仲間が汲み取り話題に触れてくれたりします。生徒講評は単なる意見の投げ合いでなく、案外チームワークが必要なのです。そんな所も楽しさの一つです。

そして、講評では一つの事柄について様々な意見が出てきます。自分では感じなかったことや、理解が追いつかなかったことについて、仲間が様々な方向から触れ、自分一人では発見できなかった新たな視点からの感情や考えを知ることができます。正反対の意見が出ることもあります。しかし講評に正解は無いので、自分が思うままに意見を言えます。だからこのような魅力的な経験ができます。

今回私が生徒講評委員長を最後まで務められたのは、出会った素晴らしい仲間のおかげです。仲が良くなければ上記のような経験をすることはできませんでしたが、講評の更なる魅力を見つけることはできませんでした。総文祭で培った知識や体験をこれからの活かしていきたいです。

講評は内容だけ聞くと「なんか難しそう」と思う人もいると思います。しかし実際やってみると、自分の意見を周りに伝える楽しさや、感情を語り合う幸せを実感できます。上演だけでなく生徒講評の魅力が、各地に広まっていくことを願っています。

(生徒講評委員長 岐阜県立岐阜各務野高等学校)

## 高校演劇の凄さ、ここにあり！



佐川 大輔

演劇の多様性、豊かさを高らかに訴えた素晴らしい大会でした。エンタメであり、アートでもある演劇。大いに笑い、涙し、感動し

たと共に、高校演劇の凄さを見せつけられました。ありがとうございます。それと同時に、優劣をつける審査が本当に苦しかった。

### 鹿児島県立伊集院高等学校『仕事のお父ちゃん』

人間への真摯な眼差しが素晴らしい。素直に感動の涙が出る万人に勧められる珠玉作。戦後大阪の設定&関西弁という「等身大ではない」物語でしたが、そのハードルを超えたのは演技の力。一人一人が舞台上で生きている。どの役者も身体性が高く、身体の使い方で人物を演じ分け、戦後の大阪が見えた。人間が変化し成長していく物語ですが、主人公が若者から老人まで演じきることで「人は変わる」というテーマを体現し、場面転換で出る通りすがりの役にも人生を感じさせた。モブキャラもちゃんと生きている。「日陰の人間にも人生があり、誰もが可能性を持っている」というメッセージが雄弁に伝わった。演出も巧み。動きだけの表現、間を活かした演出、さらに主人公夫婦の着替えをあえて見せることで、時間経過と成長も伝える。音照のキューもバッチリで、現代とセピア色の過去を繋ぎ、状況や心情を感覚的に提示してくれた。全てが美しい完成された世界観でした。

### 山口県立下関中等教育学校『レベル1の勇者』

やりたい全てを盛り込みつつ、それが奇跡的なバランスでテーマにも昇華していました。高校生らしい視点が生きた脚本が秀逸。とてモリアリティある台詞が豊富で「選択肢の少ない私達」という物語の説得力を担保しました。閉塞感のある設定に対し、演出&演技はエンタメとして成立させるべくアイデア豊富。フォントまで拘った投射画、作りこんだ小道具を使った遊び、ハチャメチャな舞台転換、舞台美術の吊り物昇降など、とにかく観客を楽しませる。それらが微妙に演劇のセオリーから外れているのが、むしろ「等身大の彼ら」と納得させられた時点で作り手の勝ち。これらの若く荒唐無稽な陽の要素があるからこそ、無情な現実という陰も生きる。終幕で投射されたレベルが上がり続ける演出は、困難に負けず成長するという決意が込められ、素直に応援の拍手をしたくなる素晴らしい幕切れでした。

### 北海道帯広三条高等学校『つばあんとチーズ』

リアリティを追求した純粋会話劇。「人間がその場にいるだけで演劇だ」という信念に貫かれたストイックな演出には脱帽しました。通常は広いホールを意識すると大きな演技をするものですが、徹底的に抑制し、音楽の音量も含め、ぎりぎりを攻める姿勢、勇気に感嘆。言葉がなくても雄弁だと言わんばかりの長い間、お金やレシートを数える動作、それらもとことんリアルであると同時に演劇としての細かい仕事が行われていました。だからこそ、日常を観察しているかのような感覚に陥る。そうして繊細な人間ドラマを積み重ねた後半、主人公が突然、感情を吐露するかのようになり積み上げたお金をばらまく劇的瞬間がより鮮烈になる。ただし1300席のホールの広さを考えると、会場全てに同レベルでこの会話劇の良さが伝わったかは気になるが、それはホールとの相性であって、作品の価値を貶めるものではないでしょう。

### 岐阜県立長良高等学校『星観る者ども』

圧倒的な演劇スペクタクル。仕込み時間が短いコンクールで、無料でこんな凄い演劇、ありがとう。理屈抜きでカッコイイ場面のオンパレード。これでもかと観客の想像力を刺激する。板を使った一瞬の転換、照明の陰からキャストが登場する魔術的演出、スーツケースでソファを作るアイデア、静止の美しさ、時代考証に沿った衣装や小道具の造作など、ビジュアルの拘りは変態レベル。劇的瞬間を緩急自在にグループよく積み重ねる作劇にプロも舌を巻くほど。散りばめられたエピソードから想像する形式の作品だが、その展開力で観客を刺激し続け、飽きさせない。俳優もとにかく立ち姿がカッコよくキャラも魅力的。タイトルからも想起されるように、観客にもそれぞれの星を見つけてほしいというメッセージか。沢山の小道具、転換要員、音照スタッフなど、総勢85名の部員、陰から支えていたであろう裏方も含めた総力結集で、素晴らしい演劇の夢を見せてくれた。

### 高田高等学校『色々々々々々々』

ダイバーシティという思想を批判的に見つめ、真っ向からぶつかった意欲作。とにかく見ていて何とも居心地が悪い。しかし、この居心地の悪さは私たちが普段見ようとしていない、あるいは見たくないものだから。空気を読まない「モモ」、発達障害を思わせるマキ、鬱になった小津先生、混血で差別されたカリンなど、そのエピソードは実は学校生活に身近なものばかり。それらを俳優が異質なテンションで演じ、あえて露悪的に表現。現実を直視せず、多様性という理想を高らかに訴える現代を痛烈に批判している。居心地が悪かったと感じたのは、まさに作

り手の術中にはまったのでしょう。表現者としての強い憤り、叫びを感じました。ただその強さが故、観客がキャッチしにくい面も散見したかも。毒を減らすと面白くないが、その表現手法を調整することで、より間口を広げ、多様性よろしく多くの共感を得やすくする方向もあったかも。

## 宮崎県立宮崎南高等学校『学校の片隅で数式を叫ぶ』

登場して数分、ほぼセリフを発さないナガノ先生。彼をまるで特別な生き物でも見るように観察する生徒3名。この緊張感ある導入を成立させた時点で大成功。大ホールの観客がナガノの一挙手一投足にくぎ付けに。演劇は観客が視点を自由に選べる芸術。この芝居ではその焦点を見事に誘導し、微細な声や動きですら、観客に目の前で起こっているかのように感じさせ、客席を一体化しブラボー。作品はオーソドックスなのだが、演者たちが真摯かつ素直にその場に生きていて清々しいうえ、先生の身体性が成長に従い変化する演出に代表されるように確かな技術もある。ダンスでのギャグもばっちり。それらが高クオリティでありつつ、観客の心を打つレベルに昇華しています。人は学びにより成長していくというテーマが、人物たちの変化で演劇として体現されていました。教育は「教えると同時に教わる」というメッセージもさらっといれて見事。

## 千葉県立松戸高等学校『私達の、小さな物語。』

とにかく幕あきから印象的で客をつかむ。ギャグもきちんと当てる。登場人物も個性的で面白い。客を魅了する手数が豊富だ。更に俳優力が高くセリフも明晰。状況説明も的確に整理して伝えてくれるので、親切で見やすい。「演劇をよく知っている」と驚かされました。加えて、作り手が楽しんでいるのがいい。音照プロジェクターはもちろん、キグルミも含めキャラが際立つ衣装、教室を模しつつ投影もできる精巧なセット、手作り感のある人形劇など小道具に至るまで拘りがあり、表現の豊かさが溢れていました。特に黒板が効果的で、未熟な登場人物たちが黒板の向こうにダイブしていく演出はとてつもない解放感。観客として「あの向こうに飛び込みたい!」と思うエモい場面でした。ラストの人形と人間が入り混じる演出を青臭く感じる大人もいるかもしれませんが、「未熟でもピュアさを忘れない」という強い宣言と受け取りました。

## 青森県立青森中央高等学校『駈込み訴え』

恐ろしい世界観、圧倒的なクオリティでした。幕あきの地の底から響く荘厳なゴスペル、客をつかむ笑いがあったかと思うとその陰に負の感情が顔を出す対比、現実と太宰の世界のシームレスな展開、あえて効果を排したクールな場転、囁きによる微細表

現からマイクによる大音量の叫び、五臓に響く生演奏のもと雪が降る美しく怖ろしい終景などなど。簡略と華美を使い分け、人間の業を最大限に表出する演出に震えました。更に主演二人が清純、色気、嫉妬など多様な顔を見事に表現すると共に、アンサンブルが確かな演技力で支えたからこそ、作品強度は圧倒的なレベルに到達したのでしょう。終幕のねぶたとサクソ混成の狂騒的演奏は、古代エルサレムが今の青森とリンクし、人間の深奥の変わらなさを見事に表現していました。あえて言えば「駈込み訴え」を現代と重ねたならば、その先の一步超えた景色(別な視点)が見たい気もするが、この凄まじい完成度では蛇足か。

## 兵庫県立東播工業高等学校『廻る』

人生を感じる作品でした。それも一人ではない。沢山の人の巡り巡る人生。幾つもの年代がオムニバス形式で進み、それぞれの変遷が見えてくる。特に大きな事件が起こるわけではない作品を支えるのは俳優陣。個性的で愛すべき人物造形で、粗野さと繊細さが会話の端々から感じ取られました。小学生から18歳までの成長過程を丁寧に演じ分け、熟練の職人が細工した工芸品のような手触りがある。舞台設定を、会話の時限設定があり世界を俯瞰できる観覧車にしたのは巧みで象徴的。世界と彼らの距離感や、先の見えない宙ぶらりんさが想像できました。演劇は制限された状況で変化を見せる芸術ですが、俳優演技によって終幕には古びて解体される観覧車に寂しさを覚えたのが素晴らしい。惜しむらくはホールに合った芝居だったか。横向きがゆえ表情、声が届きにくく、離れた客に良さが伝わったのかが気になりました。

## 目黒日本大学中学校高等学校『ごめんね、ごめん』

心から笑って気持ちの良い涙が流せる感動作。主人公トシがとにかく明るい。速射砲のようなギャグと体を一杯に使った全力演技で眩いばかり。その輝きがあるから、苦しい場面や、後半の慟哭が生きる。周りのキャラもみな個性的。登場人物が多いのだが、客が混乱しないのは各自がキャラを確立し、役割をよく理解しているから。場転も回転転換の手法をリピートするが、飽きそうな中盤からは少しアレンジを加え、飽きさせない工夫も親切。演技や演出含め、全編に人間愛を感じました。その象徴である終幕の田原俊彦メドレーによる全員ダンスはブラボー。記憶を失っていく主人公が「忘れないで」と言わんばかりに全身全霊で踊る。「忘れないよ」と彼へのエールを送るこれまでの登場人物たち。歌詞のメッセージも相まって、「どんな不条理にも笑顔で対抗する!」という決意を感じる素晴らしい終景。僕もきっと忘

## 熱い夏

れないでしょう。

## 徳島県立城東高等学校『その50分』

高校生でしか作れない現代演劇の傑作が誕生した。世界がここにあった。ドラマではなく現象を見せる芝居だ。その現象が「これは虚構？」とぶんぶん投げかけ、客に思考を要求する。設定は学校の廊下、壁一枚向うに教室。この設定で分断された今の世界を描くのが白眉。恐るべき緻密さで、廊下と教室を同じ時間軸で展開し、窓ガラス越しに伝える挑戦的演出に驚愕した。沢山の人物が各々の目的で生きていて、営みは同時多発的に進むが段取り感がない。だから全ては理解できないが、それが日々変貌する世界の縮図なのだと納得させられる。高難度の戯曲設定を完璧なアンサンブルが成立させた。後半、突然の死が訪れるが、それこそ不可避の現実。冒頭、主人公が入場口から客席登場し「上演ルールは60分以内」と緞帳を上げ開演することで、不可避の終演と共に「今この場」=限りある生を示唆する。そして終幕、死んだはずの高校生達が客席を駆け抜け抜け場外に飛び出す様は「現実立ち向かい生きる」という決意と取った。心揺さぶる体験芸術の誕生、おめでとう。

## 東京都立千早高等学校『ちんぷんかんぷんぷん』

空間に椅子だけ。そこで女子高生のリアルな日常をオムニバスで描くドキュメンタリー演劇。俳優がとにかくリラックスして、舞台上で呼吸し楽しんでいる。たまにセリフも噛むが、むしろリアルを増幅させてくれたから俳優の勝ち。だから客もリラックスし、にやにやしながら鑑賞できた。場転もマイムマイムの繰返して、全エピソードを並列に描き、よりスケッチ感が増す。また、全キャストが常時、背景に存在することで観察感を演出し、客も女子高生の生態を観察するような「見る側」の安楽さを得る。と、突然ぶすりと刺されるのがこの作品の怖さ。同じ演技体で進むが故、見過ごしそうになるが、性加害、格差、差別など不条理な現実も挿入。作品背景には千早の女子高生の怒りや苦悩があるのだ。終幕に全員で椅子を重ね巨大キャンプファイヤーを作り、狂騒的にマイムマイムを踊ることで、そのぶつける場所のない思いが燃え上がったように感じた。

全体に通底したものとして「敗者や弱者の視点」を感じました。社会問題に対し、高校生が向き合い演劇を通し表現している。今の社会を作った責任ある大人として背筋が伸びると共に、未来に希望を持ちました。皆の未来に幸あれ。

(演出家、俳優、ワークショップファシリテーター)



瀬戸口 郁

高校演劇全国大会。いいところは一瞬たりとも見逃すまいと心に決めてのぞみましたが、どの学校の芝居も熱量が高く、全部観終わったときにはグツタリ。しかし、それは心地よい疲れでした。まっすぐなエネルギーを投げこんできた高校生諸君に感謝。以下、思いつくままに講評を。

## 鹿児島県立伊集院高等学校『仕事のお父ちゃん』

お好み焼きの店主の求人広告に社会に居場所のないワケ有り連中が続々集まってくる。「ひっくりかえせ！」店主とのぶつかり合いを通じ、店もそこで働く人たちが成長していくビルディング・ストーリー。鹿児島の高校生の大阪弁演技に拍手。無対象演技は研究の余地あり。心が冷えるニュースを目にすることが多い昨今、作者はとびきり人にやさしいドラマを作り、それを高校生たちが実に素直に演じていました。観終わった後に清々しい気持ちになった芝居でした。

## 山口県立下関中等教育学校『レベル1の勇者』

「人生はくそゲーだ！」オープニングの主人公のモノログから一気に劇に惹きこまれました。作者の溝口さんの高校生だからこそ書けるセリフの瑞々しさ。劇中にゲーム要素をてんこ盛りにした遊び心。一つ一つの表現はとても荒っぽいのだけれど、細かな整合性などかなぐり捨てて劇を遊び倒す熱量の高さに揺さぶられました。エンディングがやや唐突に感じられてしまったのは惜しかったですが、楽しさがいっぱい芝居でした。

## 北海道帯広三条高等学校『つぶあんチーズ』

学校祭をめぐる女子高生の日常を戯曲、舞台装置、音響、照明、衣装すべてにおいて実に繊細に作りこんでいました。俳優の演技も魅力的でここまでリアリズムに徹して舞台を作りこんだ努力は特筆に値します。しかしこの緻密な仕立ての芝居を上演するには劇場空間が客席も含め広すぎて、この劇の面白さが後ろの方で観ているお客様には百パーセント伝わり切らなかったのではないかと、という感覚を持ちました。芝居の完成度はきわめて高い舞台だったと思います。

## 岐阜県立長良高等学校『星観る者ども』

ガリレオ、賢三、演劇部の舞台監督。中世、昭和、現代が交差するダイナミックな舞台を総勢八十名を超える部員が一丸となって展開。まずこのチームの

アンサンブル力の素晴らしさ。転換シーンすらエンタメ化してしまうサービス精神は凄いです。しかし先にあげた三つのドラマが有機的に絡み合っているとは言い難く、課題も見えた舞台でした。そんな思いがよぎりつつも長良高校の放つ圧倒的なパワーとエネルギーに私はワクワクしっぱなしでした。

### 三重県立高田高等学校『色々々々々々々々』

人は皆、口に出さなくてもそれぞれの事情を抱えて今を生きている……作り物ではなく、観る者に重い問いを投げかけてくる芝居です。ドキュメンタリーを見るような思いでこの芝居と向き合いました。主人公の女子高生の歪んだコミュニケーションが仲間や先生との間に負の連鎖を生んでいく、そして……。体と心の軋むせりふの多い、この厳しいドラマを皆、懸命に演じていました。感情が高ぶるところでせりふが聞きづらくなる点は課題に。重く苦い余韻を残す芝居ですが、私は力作だったと思います。

### 宮崎県立宮崎南高等学校

#### 『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

笑いました！ 補講の授業。内向的で何を言っているのかさっぱりわからない先生の声の絶妙な聞こえなさ。次第に「教える一学ぶ」先生と生徒の立場が逆転していくおかしさ。このナガノ先生、ダンスの学習能力が高くだけは面白すぎる。芝居の間合いと体の使い方が抜群で主演男優賞ものです。女生徒達も負けていません。宮崎弁が九州女の強さとやさしさを感じさせ、大笑いながら最後は心が温くなる舞台でした。オチの国語の補講決定も秀逸！

### 千葉県立松戸高等学校『私達の、小さな物語。』

教育実習生の青春ドラマ。幕開き「恐怖の円安」でいきなり笑わせ、オープニングの模擬授業では教育実習生の俳優たち全員が目覚めるような声を出して観客を一気に舞台に惹き込む。力強く巧い導入です。抜ける黒板、人形劇、ウルトラマン、ひまわりの花……工夫が多く、作り物の一つ一つ、完成度が高いです。しかしアイデアを盛り込みすぎて、この芝居をどこに収斂していくかが着地しきれていないのが惜しい。俳優たちの肉体の魅力、スタッフワークの高さ、総合力は高いチームだったと思います。

### 青森県立青森中央高等学校『駈込み訴え』

太宰治の「駈込み訴え」を上演する演劇部の人間ドラマを描きながら、現代の日本社会に存在する闇に切り込んだ毒のある芝居だと受け取りました。この劇には見事な「引き算」の美学がありました。それぞれの場の展開がホワイトボードに簡単な線で描かれた絵と「エルサレム」など場の表記だけで表現されていました。舞台上に余計な物を置かないことでドラマの闇が深くなる効果を高めており、劇のクラ

イマックスに向け周到に張りめぐらされた計算がことごとくはまって舌を巻きました。一瞬たりとも油断のならない舞台だったと思います。

### 兵庫県立東播磨工業高等学校『廻る』

なんだか懐かしさで胸がいっぱいになる芝居でした。観覧車という窮屈な空間で繰り広げられる男同士のむさ苦しい会話。キラキラした学生時代を送りたいんだと言いながら思いつくことは笑ってしまうほどチンケで切なくやせなく……男の青春というのはこういうものです！ 観覧車で向かい合うと観客席からウラになってしまうシーンが多くなってしまふのはもったいなかったけれど、ダメ男たちを演じる俳優たちは皆、魅力的でした。私はこの芝居を支持します！

### 目黒日本大学中学校高等学校

#### 『ごめんね、ごめん！』

萩本先生と高校生たちとの交流、葛藤のドラマ。時間の進行にともなってそれぞれの時代の懐かしワードが語られ、転換も舞台を回りながらリズムカルで軽快。いじめ問題の謎解きのシーン「Shine」が「死ぬ」だと判明するくだりなどサスペンス場面はもっと言葉を大切に。萩本と坂上のシーンはテーブルで向かい合って話していましたが、端にいるお客様からは死角になってしまうので見せ方に工夫が必要。ラストの俊ちゃんメドレーは懐かしかった！

### 徳島県立城東高等学校『その50分』

何気ない学校の日常が、「対立と分断」、今日の世界情勢を想起させる世界へと変化していく。文化祭対体育祭。教室を占拠しているダンスファシズムに対し、文化祭のリーダーが他の生徒たちを鼓舞して教室が一気に戦場へ！ この畳みかける展開はお見事。スリガラス越しにわずかに見える教室内の動き。すべてを見せないことで逆に観客の想像力を喚起する演劇的仕掛けの巧さ。同時多発的に起こる会話のせりふが聞きとりづらいという難はありましたが、私はこの劇の「突破力」の高さにしびれました。

### 東京都立千早高等学校『ちんぷんかんぷんぷん』

等身大の女子高生トークをここまで面白く聞かせるのはたいしたもの。それぞれのエピソードに客席からずいぶん笑いが起きていました。転換もソツがなく、チーム力の高さがうかがえます。しかし、このドラマの根っこにある「今が一番たのしいはずなのに……」という高校生の本音が、後半もっと大きな展開に昇華していけばさらに揺さぶられたのでは、との思いが残りました。一人一人の俳優たちの演技は皆、瑞々しく魅力いっぱいでした！

(俳優・劇作家・演出家)

## 演劇好きから皆さんへ



佐々波 雅子

全国から選ばれた演劇大会だけあって素晴らしい作品が揃いました。ジャンルも違うので甲乙つけ難い中、高校生にしかできない

作品とは？私も悩みながら選びました。自分の演劇に対する気持ちも新たに認識した3日間でした。

## 鹿児島県立伊集院高等学校『仕事のお父ちゃん』

戯曲やキャスト、空間、衣裳の使い方が非常に好印象でした。基本衣裳に $+α$ を加える手法が効果的で、時の流れも視覚的に衣裳で分かりやすく表現。黒箱と台で構成された舞台や、黒幕で間口を縮めたホリゾン幕は見やすく、照明による時間の経過も明確でした。石段の布ケコミや暖簾のリアルさも良かったです。オーラスの歌は感動的で、思わず涙ぐみました。正面の障子も工夫を凝らせば、さらに良い作品になると思います。

## 山口県立下関中等教育高校『レベル1の勇者』

ゲームの世界を舞台にした楽しい作品でした。ホリに映し出されるゲーム画面や効果音での感情表現には笑いました。荒削りながらも役者たちの頑張りが伝わり、装置も楽しんで作った感が伝わります。装置が回転してカラフルから赤と黒の闇に変わる工夫や、吊り物のスピード感、クマのぬいぐるみ、ソファの後ろの樹の使い方も面白かったです。下手装置の油絵をひっくり返す理由を聞き忘れたので、機会があれば知りたいです。

## 北海道帯広三条高等学校『つぶあんチーズ』

学校の備品を上手く使ったリアルな装置が、本物の生物準備室のようで良かったです。ほぼ二人で演技切ったことは素晴らしく、セリフのないシーンでも自然に見え、好印象でした。後ろの背景に人物が溶け込む雰囲気はリアルでしたが、もう少し人物をはっきり見せても良かったかもしれません。二人の対比も良く表現され、心温まる作品でした。橘先生のパンク衣裳も面白く、地域色の出た段ボールなども楽しかったです。100人くらいの劇場でじっくり見たい作品でした。

## 岐阜県立長良高等学校『星観る者ども』

吊り物オブジェが地動説や3つの異なるストーリーを象徴しているのか？非常に効果的でした。オープニングのガリレオのシーンでは、暗闇からゆっくりと群像が浮かび上がる照明効果が秀逸で、一瞬で引き込まれました。舞台転換も巧みで、雛壇に組み込まれたライトでシーンの変化を見事に表現していました。トランクを使ったオブジェクト作りや、ファッションショーをテーマにした衣裳も細部まで工夫されており、素晴らしかった。3つのストーリーが少し盛りだくさんに感じられるので、少し整理し影役が導くなどの工夫があると、さらに良い作品になります。今後の発展を期待します。

## 千葉県立高田高等学校『色々々々々々々』

虹を感じさせる7色の旗や花が文化祭の華やかさと明るさを表現していました。心の葛藤や内面をテーマにした作品ながら、明るい装置がその難しさを和らげ、バランスの取れた舞台に仕上がっていました。飾りに奇麗だけでなく深みを加える工夫があればテーマがさらに引き立ったかもしれません。

## 宮崎県立宮崎南高等学校『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

シンプルな舞台装置ながら、教室の雰囲気をよく表現していました。数学の先生のキャラクターが素晴らしく、ドアに立つ姿や教壇での猫背など、細かい動作まで精密に計算された演技が印象的でした。先生が突然チェンジする瞬間は非常に効果的でした。方言の使い方もネイティブで、さすがです。生徒たちの優しさや温かみが伝わり、とても好感が持てました。転換の照明タイミングを調整すると、テンポがさらに良くなります。

## 千葉県立松戸高等学校『私達の、小さな物語。』

プロジェクターの位置や投影場所、スライドの使い方、舞台装置が整理、県大会から大幅に改善され、舞台が洗練されて見やすくなっていました。黒板が外れて空間を抜ける発想は秀逸。人形の使い方や、椅子の向きを変えて教室の空間を使い分ける方法も巧み。黒板の枠に飛び込むシーンでは、空間が広がり役者が宙を飛んでいるような錯覚を生む素晴らしい効果がありました。しかし、人形の登場後に黒板枠がプロセニウムに感じられ、空間が縮小する感じがあります。人形の存在は面白いのに大らかさが損なわれるので対策を考えてみてください。全体的に演技も優れていて、好感の持てる秀作でした。

## 青森県立青森中央高等学校『駈込み訴え』

ホワイトボードと椅子のみを使用したシンプルな装置ながらも、舞台空間が巧みに表現されていました。ホワイトボードに描かれる部室、エルサレム、最後の晚餐、十字架などの記号的な場面はシンプルでありながら深い意味を持ち、非常に効果的でした。また、雪が心の動きや感情、嫉妬を象徴し、雪が降り注ぐ中で楽器を奏で踊り狂うシーンは圧巻でした。雪の白と黒い空間のコントラストが美しく、見入ってしまいました。ルーマニアでの在外研修経験があるので、ブルカレーテ氏の演出にインスパイアされている点にも個人的に共感し、嬉しく思いました。

## 兵庫県立東播工業高等学校『廻る』

ホリゾン幕との組み合わせで観覧車の使い方が効果的でした。ランドセルや制服、衣裳で小学6年生から高校3年生までの成長が視覚的に伝わり、時代や季節の移り変わりもよく表現されていました。ホリに説明キャプションがありましたが、人間関係図があるとさらに理解しやすかったかもしれません。また、横向き芝居だと声が聞こえにくいのが残念でした。全体としてとても好感の持てる作品でした。

## 目黒日本大学高等学校『ごめんね、ごめん！』

1年生が演じた萩本役は見事で、熱演が光りました。タブレットを使ったタイトルロールは行燈のようで、とても印象的でした。装置を回転して転換する

手法はシンプルながら効果的でした。後半の坂上と萩本、守衛とのやり取りは見入ってしまいました。逆回転して時代が戻る演出も効果的でした。オーラスの劇場が一体化したダンスは素晴らしかったです。

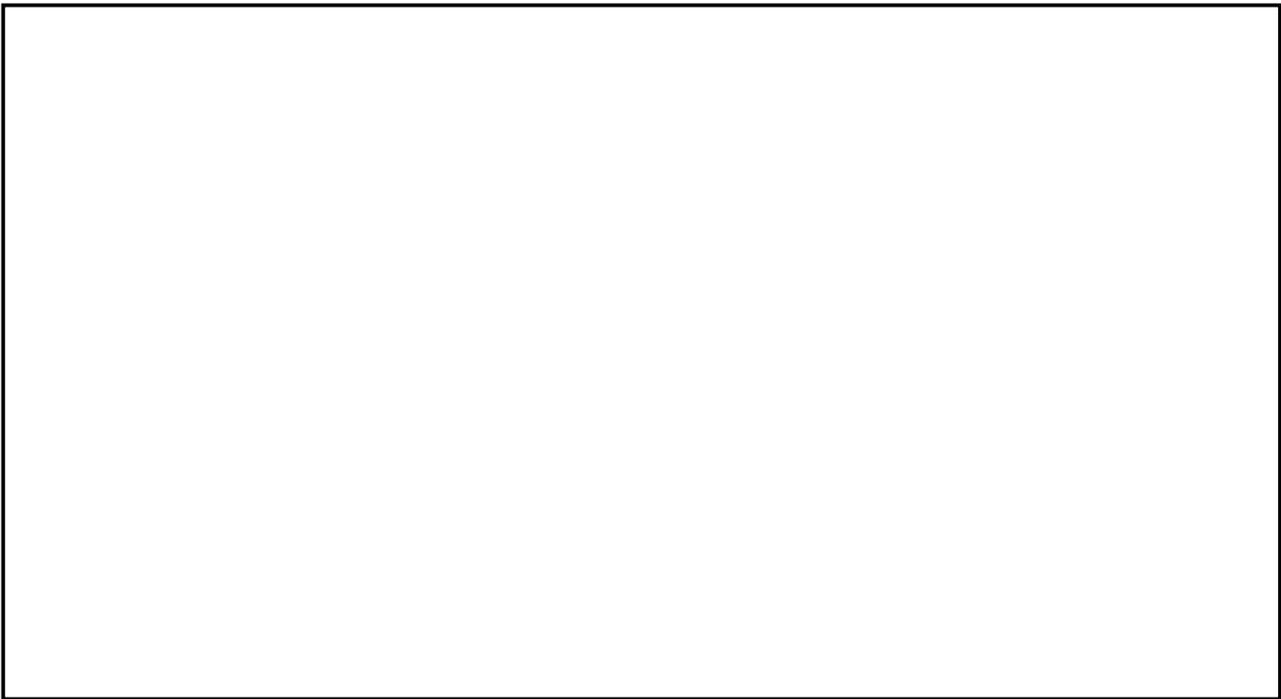
## 徳島県立城東高等学校『その50分』

学校の日常の中で訳が分からない騒動に巻き込まれていく様に戦争の始まりを感じ、机を積み上げるシーンは70年代の学園紛争を彷彿とさせ、引き込まれました。アイリンの存在や繰り返す「その50分」というテーマも興味を引きます。脚本、美術、演技も素晴らしく、非常に良い作品です。舞台装置は学校の雰囲気を見事に表現し、斜めに配置された装置が物語の不安感と調和していました。廊下をメインとした設定やギザギザの壁のデザインも印象的で、よく考えられています。

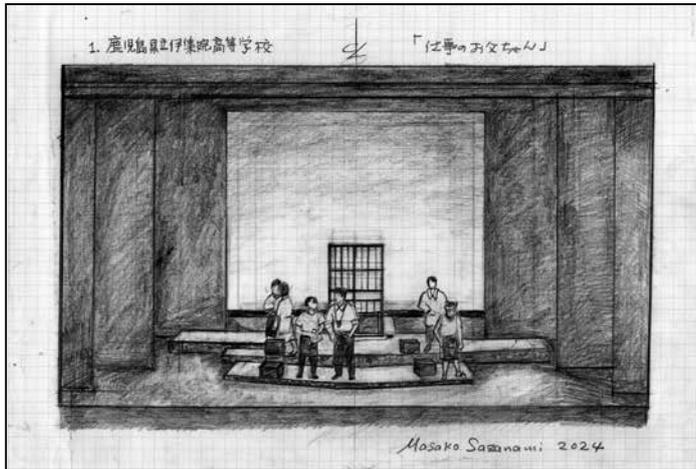
## 東京都立千早高等学校『ちんぷんかんぷんぷん』

色の上着で先生を分かりやすく見立て、日常の一幕をリアルに切り取った内容が面白かったです。椅子の配置で空間を作り、ラストシーンの椅子を積み上げて照明で見せたキャンプファイヤーは圧巻。とても計算された構成でした。内容は新しいのに前回の公演と手法が似て感じたので、さらに新しいアプローチを加えると斬新な作品になると思います。

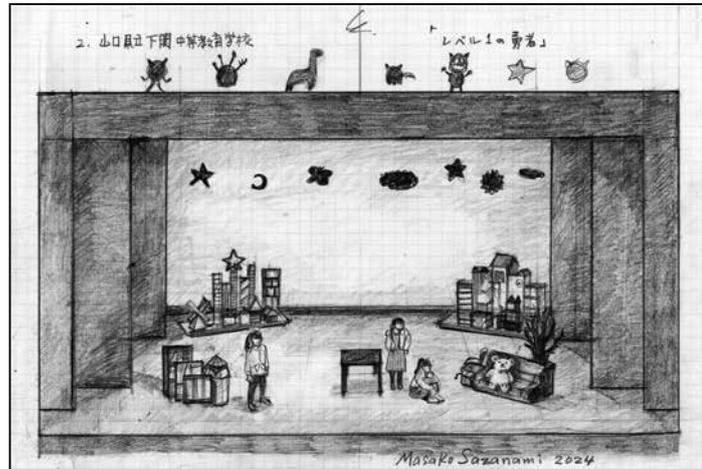
(舞台美術家、舞台衣裳家)



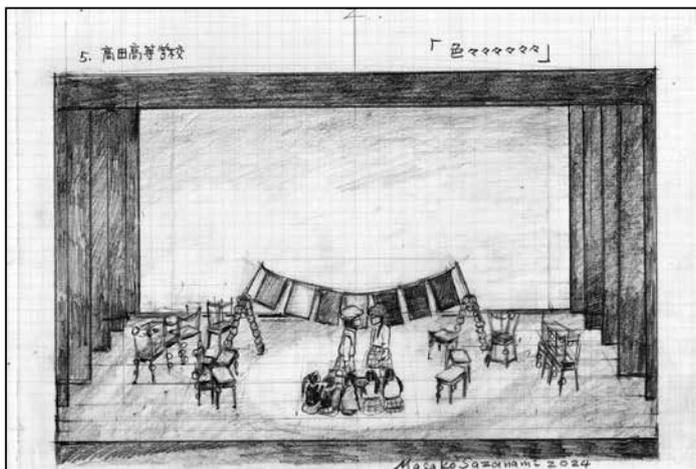
# 第70回岐阜大会



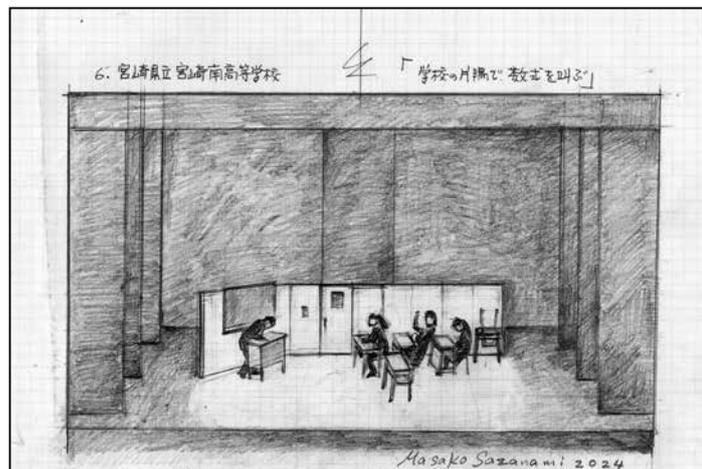
鹿児島県立伊集院高等学校  
『仕事のお父ちゃん』



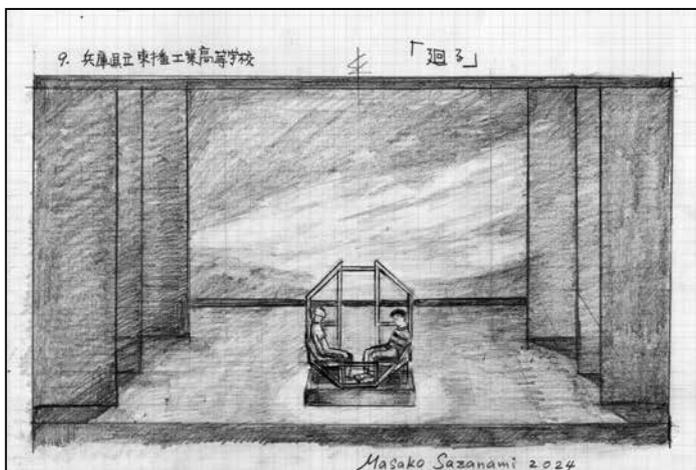
山口県立下関中等教育学校  
『レベル1の勇者』



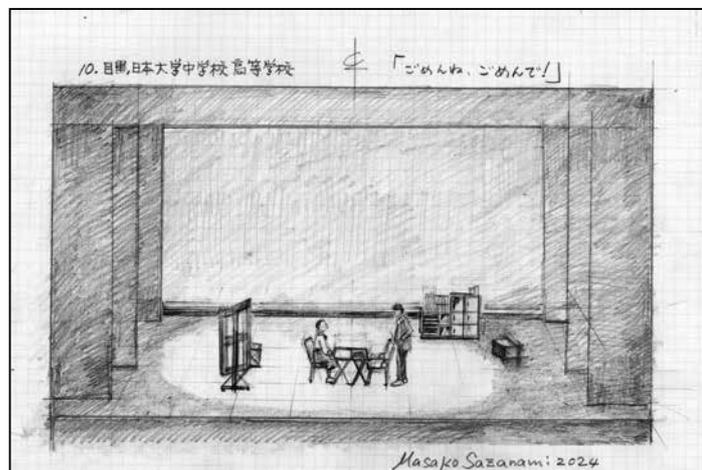
高田高等学校  
『色々々々々々々』



宮崎県立宮崎南高等学校  
『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

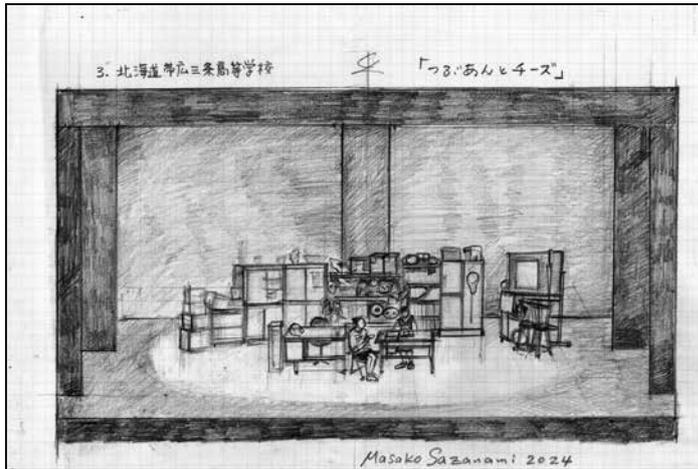


兵庫県立東播工業高等学校  
『廻る』

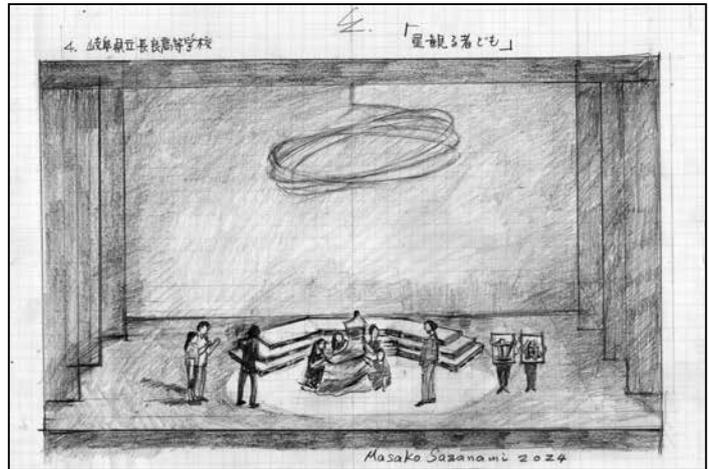


目黒日本大学中学校高等学校  
『ごめんね、ごめんね!』

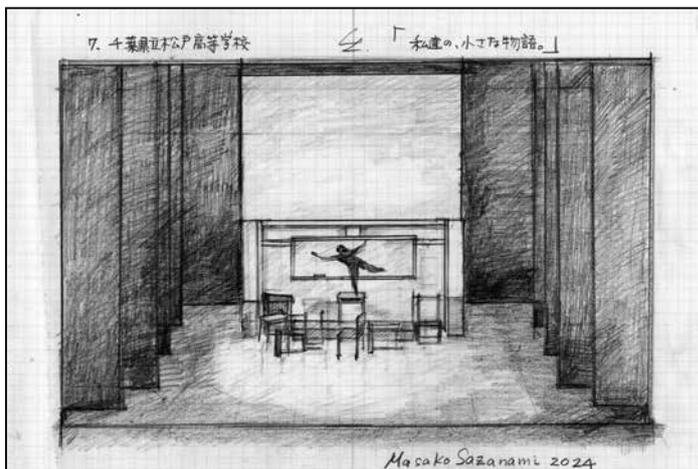
# 舞台



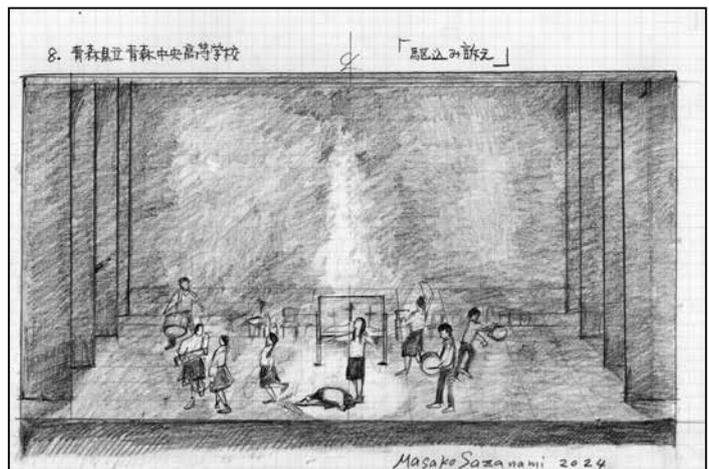
北海道帯広三条高等学校  
『つづあんとチーズ』



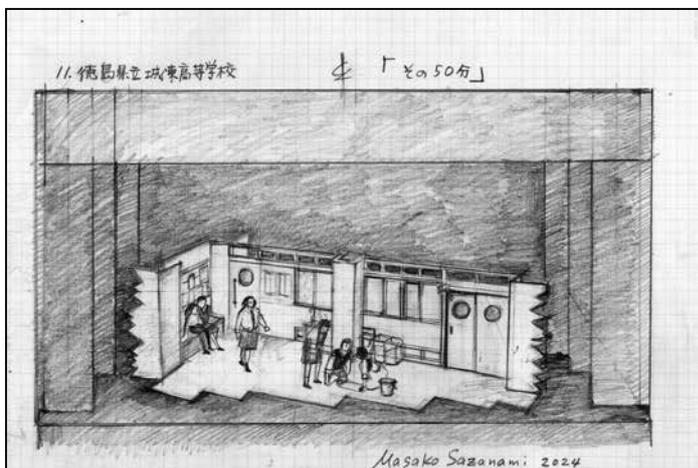
岐阜県立長良高等学校  
『星観る者ども』



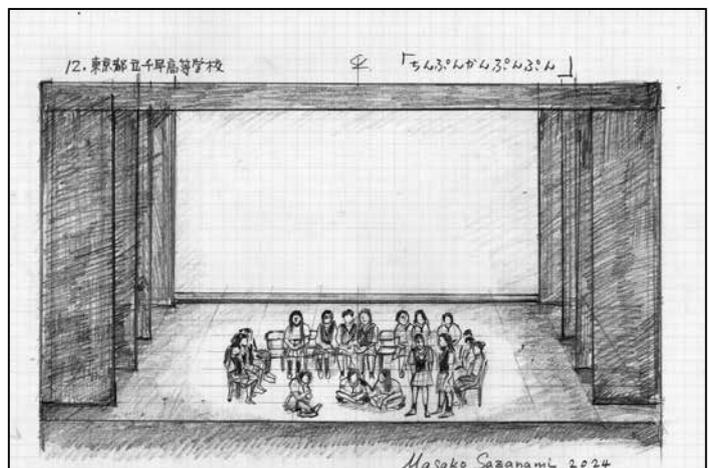
千葉県立松戸高等学校  
『私達の、小さな物語。』



青森県立青森中央高等学校  
『駈込み訴え』



徳島県立城東高等学校  
『その50分』



東京都立千早高等学校  
『ちんぷんかんぷんぷん』

## 第70回全国高校演劇大会を観劇して



越光 照文

## ○はじめに

会場の「不二羽島文化センター」は、詰めかけた多くの観客や演劇に情熱を燃やす若者たちで溢れ、2020年から3年以上にも及んだコロナ禍の痕跡を、露ほども感じさせぬほどの熱気で充ち満ちていた。芸術作品に優劣をつけることへの心理的抵抗感があったものの、全国から選ばれた参加12校の甲乙つけがたい舞台成果に、逆に励まされ勇気づけられる思いで審査にあたった3日間であった。以下に、それぞれの作品の寸評を記すことにする。

**鹿児島県立伊集院高等学校『仕事のお父ちゃん』**

一代で「海外にまで支店を持つ、一大お好み焼きチェーン店」へと築き上げた実在の人物をモデルに、働くことの尊さとその美しさを歌い上げるヒューマン・ドラマとして、心癒やされる作品であった。タイトルの『仕事のお父ちゃん』の意味がストーリーを通して見事に表現されていた。多場面の回想シーンがテンポよく展開され、多くの登場人物を少ない俳優たちで、丁寧に描き分けていたことに感心した。鹿児島の高校生たちが、大阪弁を違和感なく駆使するまでの、その努力は並大抵ではなかったろう。

**山口県立下関中等教育学校『レベル1の勇者』**

今回のパンフレットにおける「上演にあたって」の欄には「脚本・演出から全て生徒で作りました」とあった。顧問の先生方の指導を頼りにするのではなく、生徒たちが「これぞ」と思うものを、それぞれ自由で奔放に創り上げた清々しい作品であった。両親の離婚に悩む主人公を、二人の友が支え励ますストーリーも、私の世代ではとても思いつかないゲームの手法を駆使するなどして、まさしく新しい世代にしか描けない演劇となっていた。これからも「型無し」ではない「型破り」な作品作りを目指して、その伝統を繋いで行って欲しいと願っている。

**北海道帯広三条高等学校『つぶあんチーズ』**

まず、脚本の完成度の高さに驚嘆した。学校祭でのバザー会計担当者の「桃花」と「夏美」の二人が、生物準備室で集計作業をしている数時間を描いているだけなのだが、何気ない二人の会話が、それぞれの性格や境遇の対比を丁寧に描いていて無駄がない。そして、何よりも二人の女生徒の「暫しの作業」と指定された脚本を見事に活かしたリアルな演技が秀逸だった。舞台装置の生物準備室も緻密に飾られていて素晴らしい。まさに、日本における近代演劇の伝統を正統に引き継ぐ脚本・演出・演技の典型であったと評価しておきたい。

**岐阜県立長良高等学校『星観る子ども』**

コペルニクスによる地動説を追う「中世の時代」と、後に世界的なファッションデザイナーとなる高田賢三・コシノジュンコの若き日を描く「昭和の時代」、それに加えて、完璧な上演を目指す高校演劇部の「現代」という三つの時代を、めまぐるしいほどのテンポで交互に描きながら、壮大なスペクタクル演劇を創造した。60人にも及ぶ俳優たちの演技が、一糸乱れぬほどによく訓練されており、そのダイナミックな演出と相まって、時間を忘れるほどのエンターテインメント作品となっていた。劇中に「照明、音響、大道具、衣装、小道具、制作、役者…、全てが綺麗に噛みあった最高の舞台に！」を目指す高校演劇部が描かれるが、まさにその野心的な試みが実際に成功していた作品と言ってよいだろう。

**高田高等学校『色々々々々々々』**

タイトルの『色々々々々々々』が示す通り、多様性をテーマとした芝居であった。文化祭を二日後に控えての、クラスの演目を稽古する過程で、主人公「モモ」と演目に関わ

るクラスメイトとの関係の齟齬を描きながら、相互に様々な事情を抱えるが故に、多様性を理解することの困難さを問う作品となっていた。文化祭の装飾であろうと思われる七色の旗を舞台の中央に配し、登場人物も7人に限定するなど解りやすく伝えようという工夫が見られた。演技や演出も奇をてらったものではなく、高校生らしい素朴な健全性とでも形容すべき質のものであった。特に幕切れの「かごめかごめ」のシーンには胸を打つものがあった。

**宮崎県立宮崎南高等学校『学校の片隅で、数式を叫ぶ』**

数学の補講授業での、教師と演劇部3人の女生徒の間に交わされた、心温まるエピソードに満ちた作品であった。授業することに自信をなくした数学教師が、演劇部の3人に逆に教師としての在り方を教わる、という物語に冒頭から引き込まれた。数学教師の戯画化されているが嫌みの無いユーモア溢れる演技や、今時の高校生をのびのびと演じきる3人の女生徒の演技に魅了された。脚本も完成度が高く、読みものとしても十分に楽しめる出来映えである。パンフレットには「今回の作品は、たくさん笑って、少しでも心が軽くなってくるといいなと思い創作しました。」とあるが、狙い通りの舞台成果となっていた。幕切れ近くでの、生徒たちが叫ぶ数式の声に思わず胸が熱くなるほどであった。

**千葉県立松戸高等学校『私達の、小さな物語。』**

教育実習のために母校に戻った7人の大学生を中心に、高校の教育現場における諸問題を実習生の格闘を通して描くと同時に、混迷を深めるこの社会において、現代の若者たちが自らの将来を見つめ直そうとするさわやかな群像劇となっていた。教育実習生たちが、自分たちだけで模擬授業をするという設定にまずは感心した。模擬授業をする中で、それぞれの実習生たちの個性が、安定感のあるしっかりとした演技によって見事に描き分けられていた。また、実習生の控え室である教室が、必要最小限の装置でリアルに飾られており、中央に配した黒板を、映像や人形劇のプロセニウムとして使用するなど工夫に満ちていた。この学校の優れたところは、何と言っても脚本、演出、演技、美術にいたるまでのその総合力にあるだろう。

**青森県立青森中央高等学校『駆込み訴え』**

高校演劇部が地区大会を目指して、演目に選んだ太宰治の『駆込み訴え』を稽古する過程で、演出担当の生徒「コスズ」と演出助手の「モモカ」をキリストとユダの関係に投影しながら、演目の『駆込み訴え』におけるユダの独白を見事に転用しつつ、見ていてハラハラ、ドキドキする壮大な人間ドラマを展開した。脚本が『駆込み訴え』とこの演劇部の人間関係を見事に対応させるものとなっていて、ユダのキリストに対するアンビバレントな感情と、キリストの唯我独尊ぶりを「コスズ」役と「モモカ」役の二人がこれも見事に演じていた。「モモカ」の「コスズ」への裏切りに、大学受験における推薦枠の問題を絡ませるなどして、高校生の現状を描いて余り有るものがあった。また、ユダの台詞を出演者全員で担うアイデアが秀逸で、演者たちもプロの集団に匹敵する素晴らしいアンサンブルを創っていた。ホワイトボード一つだけの装置で、この演劇部の部室から時によってはパレスチナの地を彷彿とさせもする見事な舞台であった。

**兵庫県立東播工業高等学校『廻る』**

2017年3月から2023年3月までの、関西のある街に設置された観覧車及びその跡地で舞台が終始進行する、というその状況設定にまずは引き込まれた。観覧車は舞台なのでもちろん動きはしないのだが、そこに集いまた別れる数組の仲間たちの、中学から高校までのそれぞれの時間による変遷が、いかにも観覧車が回っているような空間的にも変化を想像させる作品となっていた。6年間という時間の経過の中で思春期の男子たちが中学、高校、大学とそれぞれの受験の機会ごとに出会いと別れが繰り返される筋立てと相まって、いかにも工業高校生らしい荒削りで男臭い豪放磊落な演技が、逆に見ている者の感傷を喚起する作品であった。

**目黒日本大学中学校高等学校『ごめんね、ごめん！』**

俗に言う熱血教師であった「萩本」の教師人生を、1990年代、2000年代、2010年代、2020年代、そして最後に現在を描くことによって、それぞれの時代環境を教育という現場を通して描きながら、いつの時代においても足掻き藻掻いて闘った高校生である教え子たちとの触れあいを感動的な物語として仕立て上げた。また、脚本の随所に「人生は向かい風だ」そして「人生に伏線回収も答えあわせもない」と言った名台詞が散りばめられており、読み物としても力があり楽しめた。加えて、学校を立ち去る「萩本」が教師を志す切っ掛けとなった恩師に変身し、若き日の高校生時代の自身が描かれるラストシーンは、この物語に込められた「伏線」を見事に「回収」する作品となっていた。エンディングでの、これまでに会った様々な生徒たちに囲まれて、楽しげに踊る「萩本」の姿に思わず胸が詰まる思いだった。

**徳島県立城東高等学校『その50分』**

まずは、教室を奥に配置させた舞台装置の廊下が、まるで移築された本物の教室の一部のように飾られていて見事であった。ある高校のある日のクラスの日をリアルに描いた群像劇として出発するのだが、劇が進行するうちに生徒たちの間で、間近に控えた体育祭の練習や文化祭の準備をめぐる、教室や廊下のスペースの取り合いが始まり、高校生活の日常を描いたリアリズム劇から、教室のスペースの取り合いを通しての、覇権を争う不条理劇へと変質を遂げ、この劇中世界をどう解釈し受け止めるべきか、観客の観劇理解までも不安にさせる問題作となっていた。あるクラスでの生徒関係のズレを描きながら、そのズレが今日の世界の混迷、ウクライナや、中東ガザ地区での戦争や紛争の投影であるようにも感じさせるスケールの大さを有していた。それは「新しい戦前」と形容されもしている今日の日本のメタファーともなり得ているように思えた。まさに、プロの劇団による演劇をも凌駕するリアティーとアクチュアリティーとを有している、と評価してもよい作品であった。

**東京都立千早高等学校『ちんぷんかんぷんぷん』**

女子高生たちの、それぞれの学校生活や家庭内での問題を、30ものエピソードをふんだんに盛り込みながら、彼女らの日常を赤裸々に描くという方法を取った作品であった。総勢21人の女子高生たちが、自らの身近な問題を取り上げながら、等身大のリアティーある女子高生像を創り上げていた。また、画家による「自画像」のごとく、舞台の高校名も自らの学校名を取って使用するなど、大変に勇気のある作品ともなっていた。演出においても、全ての登場人物を制服姿の女子高生が演ずるなど工夫をこらすと同時に、装置に頼ることなく、学校の椅子のみを使用して多場面のシーンを無理なく描いていた。破天荒なエピソードが続いただけに、まるでキャンプファイヤーのように積み上げられた椅子の周りで、全員が「マイムマイム」を踊るラストシーンが何とも言えず切なかった。

**〇おわりに**

今回の第70回全国高等学校演劇大会は、出場12校の作品の舞台成果が究めて拮抗しており、審査する側にとっては各賞を選ぶに際して、本当に苦渋の選択を迫られる大会であった。私の持論ではあるが、高校演劇の果たす役割がこの国の演劇界をどれほど、その根底において支えているか、その重要さを改めて認識する大会となった。全国の高校演劇部で活動する高校生、ならびに高校演劇指導者の先生方に改めて敬意を表しておきたい。最後に、大会運営を担っていた高校生たちの、毎回の工夫を凝らした前説における寸劇が、上演前の客席を和らげると同時に集中力を喚起し、各上演校の発表へと導く見事な進行ぶりであったことを追記して、その健闘に拍手を送りたいと思う。

(桐朋学園芸術短期大学)

**演劇の「豊かさ」**

千葉 和代



12校の上演はどれも「豊かさ」に溢れていて。それは“比べようがなく”“誰もが光る”“深部から心揺さぶられる”“観劇後に広がる余韻がある”ことを実感。演劇って本当に

素晴らしい！全ての上演校に心から敬意と感謝を。

**鹿児島県立伊集院高等学校『仕事のお父ちゃん』**

丁寧に作り込まれた舞台。タイトルの「お父ちゃん」から連想される芯のあるあたたかさが全体に溢れていた。「ひっくり返すんや」という言葉は、全ての人が希望を持って生きることへの力強いエールに感じた。正次と栄美子の出会いのシーンでは、交互に少しずつ近付いていく演技で、恥じらいながらも確実に惹かれ合う気持ちが伝わった。ハッとするシーンで少し明るくなる照明、舞台上での鮮やかな衣装替え等、スタッフワークのクオリティの高さを感じた。

**山口県立下関中等教育学校『レベル1の勇者』**

劇全体から、やりたいことを伸び伸びとやることが伝わってきた。登場人物の気持ちを高校生視点で描き切っている姿に好感が持てた。「人生はクソゲー」と感じる優日。それは、“選択肢を間違えない”ことを大事にするあまり生じているのだとわかる。その選択基準は、「好感度が上がるか下がるか」。ゲームの世界を効果的に用いていて非常に分かりやすかった。「自分は本当はどうしたいのか」を考え始める優日の姿に、今後逞しくレベルアップしていく未来を信じた。

**北海道帯広三条高等学校『つぶあんチーズ』**

丁寧に作り込まれた舞台から、観客は想像の豊かさを享受できる秀逸な作品だった。友達百人、あんこ、スケート等々の話題を通して、この地で育った夏美の姿が浮かび上がる。一方、6度の転校により「友達なんて作らない方がいい」と考える桃花。夏美の転校が明らかになる中、二人が未だ経験していない立場になると気付いた。「賽の河原」等の対比や、「紅」のテンポや歌詞が舞台に深みを与えていた。役者の表現力からも感情を揺さぶられ、劇の世界観に没入した。

**岐阜県立長良高等学校『星観る者ども』**

3つの「時代」を通じて、「影」の存在に光をあてた作品。見事な舞台転換と役者のアンサンブルが観客を惹き付けた。衣装や小道具等が効果的に用いられており、劇に説得力があった。昭和時代、近藤淳

子の「花を咲かせる土はね、別に花になれないから土でいるわけじゃないんだから」が象徴的。「影」の共通点として「一人ではない応援者がいる」「自分を持っている（出している）」ことだと感じた。試行錯誤に裏打ちされた工夫が見ごたえと説得力を創出していた。

## 高田高等学校『色々々々々々々』

舞台を通して多くを考えさせられた。「私を主役って認めてくれる人が好き」と語るモモが身に付けているピンクは、母が「似合う」と言ってくれた色。劇中、モモは母から十分な愛情を受けていないことが明らかになる。文化祭のテーマは「多様性」だが、練習は思うように進まない。「色々」と理由を濁す人に「その色々が大事なんちゃうん」と迫るモモ。多様性を認めるとは“知られたくないことを知る”こと。加えて、“自身が無条件に愛される経験”の必要性について考えた。

## 宮崎県立宮崎南高等学校『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

方言のあたたかみに加え、とにかく4人の演技が光る舞台だった。序盤から爆笑を誘っていたが、舞台が進むにつれて物語に自然と引き込まれていった。「僕のせいで生徒の未来を奪ってしまうことが怖い」と自らを「教師失格」と話すナガノ。それに対して3人が「私たちも生徒失格」と返す場面にぐっと来た。台詞がきっかけとなり本質（補習）が深まったり、人間関係が構築されたりする展開が痛快で、演劇のもつ力やその可能性についても示唆していた。

## 千葉県立松戸高等学校『私達の、小さな物語。』

7人の教育実習生を描いた劇。幕開き、制服を着ているが生徒ではない、授業をしているが先生（教諭）でもないというシーンが象徴的。実習後、7人の不安や悩みが吐露される。一歩踏み出そうと具体を語りつつ「迷い」も認識し、「それが私」と受け止める。3週間の出来事は「小さな物語」だけれど、「大きな意味を持つ物語」でもあると感じた。7人を描くことで、観客は誰かに自身を投影しやすくなった。それは「誰もが物語を持っている」ことを示し、応援するようなあたたかさも感じた。

## 青森県立青森中央高等学校『駆込み訴え』

人間の内面をあぶり出した傑作だった。モモカは優秀な演出助手（兼照明）だが、部長で演出のコスズへの思いがある。劇中、コスズ（イエス）の言動に振り回されつつ、懸命に役割を果たすモモカ（ユダ）。“裏切り”に至る過程、コスズの一挙手一投足に歓喜落胆憎悪するモモカに共感した。ラスト、カラフルな照明の中、イエスに抱きしめられるユダ。降り積もる雪。サクソとねぶた太鼓、鐘の音色が際

立つ。ユダの狂気に胸が苦しくなった。時代を超えて原作の世界観を現代に蘇らせていた。

## 兵庫県立東播工業高等学校『廻る』

地元の観覧車。乗っている間は“普通”が“少し特別”になる感情や関係性が丁寧に描かれていた。「自分ち基準」で見えていた景色が「段々自分の方が小っちゃくなってってる」に変わる感覚に共鳴した。最後、観覧車は無くなるが、フィリピンに運ばれて廻っている説明に「変わる事・変わらない事」を連想。6年間の彼らの姿から、廻りつつ同じ所には到着しない“螺旋状の成長”を感じた。それは時に不安定や停滞もあるが、逞しさや柔軟さもあると実感した舞台だった。

## 目黒日本大学中学校高等学校

### 『ごめんね、ごめん！』

4つの「過去」を通して、萩本先生の後悔が浮かび上がった。現在、病気を抱える萩本先生へ守衛さんの「大丈夫ですよ、生徒たちは忘れませんから」が救いになった。ラストのダンスシーンは感動的だった。舞台上で踊る人々が萩本の教え子たちに見えた。全開の笑顔は、萩本の後悔を払拭する“生徒からのフィードバック”にも見えた。4つの時代を時計回りに転換する手法が見事だった。時代を表す内容やその表現の仕方も緻密で細かなこだわりを感じた。

## 徳島県立城東高等学校『その50分』

圧巻だった。「戦争」「命」「日常」について、自分事として突き付けられた気がした。アイリンは生きているから「その50分」を一生懸命想像する。観客はその想像を通して、何気ない日常にある“戦争を想起させる要素”の多さに気付く。ラスト、アクティングエリアを超えるか躊躇する面々。「ルール違反でもいいよ！生きてたら！！」が背を押した。アイリンの絶叫「行かないで」に胸を締め付けられた。「命」「戦争」「日常」とは何か……。考え続ける必要があると感じた。

## 東京都立千早高等学校『ちんぷんかんぷんぷん』

女子高生図鑑を見ているようだった。日々のエピソードや気付きについて、生きた言葉から紡ぎ出される台詞がリアルだった。中でも「社会的弱者って？」が印象的だった。女子高生として、世の中から定義付けられることへの軽やかなアンサーにも見え、続きを観たいと思った。エピソードが積み重なって立体的になる様が、ラストのキャンプファイヤーに繋がっていた。キャンプファイヤーの火はいつか消える。限られた期間である女子高生時代を象徴しているようにも見えた。

（北海道余市紅志高等学校演劇部顧問）

## 迷の世界を生き抜く力



原田 一雄

高校演劇が新たな舞台表現の地平を切り開く可能性を感じた三日間でした。また、演劇創造を通して混迷の世界を生き抜く逞しい若者が育っていることを改めて実感した日々でした。

## 鹿児島県立伊集院高等学校 『仕事のお父ちゃん』

旧くて新しいドラマ。そこには、忘れてはならないものが詰まっている。人間なんて世の中なんてこんなもんだという安易な諦め、それがもたらす底なしの不信感と差別への強烈な怒りがこの作品の基盤だ。丁寧に書かれた戯曲と優れた演出と生徒たちの素直な演技が深い感動を生み出した。「ひっくり返すんや…お前もや。ひっくり返せ…。(泣く) その手で…。」苦労したであろう関西弁が今も耳に残っている。

## 山口県下関中等教育学校 『レベル1の勇者』

ゲームの世界に託して次から次に多彩な表現が連続する。両親の離婚によって優日(主人公)は理不尽な選択を迫られる。混乱し葛藤する優日を創作部の仲間が叱咤激励する。ゲームの中の勇者となってレベルを上げて魔王たちと戦えと。両親が魔王になり替わったり、映像・音響を駆使して戦いぶりが活写される。楽しくないはずがない。敗北にもめげず理不尽に立ち向かう優日の姿が清々しい。高校生によって書かれた秀逸な作品だ。

## 北海道帯広三条高等学校 『つぶあんとチーズ』

リアルに作られた生物準備室。黙々とバザーの売り上げの硬貨を数える桃花、飽きて遊び始める夏美。二人の会話はしばしば途切れて「暫しの作業」の間(ま)が訪れる。セリフよりも雄弁な間(ま)に促されて二人は語りだす。おやき(あんことチーズ)が友を求める二人の心を近づける。それも束の間、夏美の家族が離農して転校することが告げられ、二人が黙々と硬貨を数える中で幕が下りる。リアリズムの極致。「しばしの作業」の間の夏美の演技に感心した。

## 岐阜県立長良高等学校 『星観る者ども』

ガリレイ「地動説」の異端審問の中世と昭和のファッションの世界と現代の演劇部の世界が三つ巴に展開する壮大な構想のドラマ。60人を超える生徒たちが躍動するにはこの壮大な構想が必要だったと納得した。演技も装置も照明も音響も衣装もすべ

てがこの大胆な試みを盛り上げた。この圧倒的な舞台表現はまさに部員たちの飽くなき挑戦の賜物なのだ。ガリレオにも賢三にも最高の舞台を求めて妥協しない演出にも支える陰の存在がいた。いまその陰の存在に支えられて幕が上がる。「本番行きます!!」と叫ぶ舞台監督の姿が印象に残る。

## 三重県 高田高等学校 『色々々々々々々』

不思議なリアリティを感じさせる作品だった。痛みやハンディを抱えながらも懸命に生きようとしている姿が、ある時は突飛な、またある時はひとりよがりな言動を通して直接迫ってきた。本気で向かい合っで見ようとしなければ見落としてしまっているところに視点を定めている。困難を抱えた当事者のあるがままの姿を見据えることなくして安易に多様性を語ることを戒めているように感じた。素朴な形、色あいのオブジェが作品にマッチしていた。

## 宮城県立宮崎南高等学校

## 『学校の片隅で、数式を叫ぶ』

ナガノ先生の小さな声に女生徒も観客も一斉に身を乗り出して耳をそばだてた。この瞬間、舞台と観客席の壁は消えた。身を屈め視線を下に向けているナガノが徐々に視線を上げダンスに至る演技が絶妙。演劇部員の女生徒たちが作った先生再生の脚本を読んでそれに応えようと決意するナガノ。胸倉をつかんできた生徒を思いやるナガノの言葉が心に響く。脚本、演出、演技ともに秀逸。

## 千葉県立松戸高等学校 『私達の、小さな物語。』

生徒と教師の狭間でどっちつかずの存在。そんな教育実習生たちの現在は過去と未来が交錯する。一筋縄では捉えられない生徒に振り回され、一方では世間の同調圧力に屈しない生徒に圧倒される。ウルトラティーチャー義村は、ウルトラマンに託して実習生たちに夢を伝える。舞台の正面に大きな黒板がしつらえられ、不可欠で不変な私を目指して旅立つ実習生たちが黒板向かって飛び込む仕掛けに驚き若者たちへの作者の熱い思いを感じた。

## 青森県立青森中央高等学校 『駈込み訴え』

太宰の原作の引用と演劇部の出来事が緊張感をもって絡み合う展開にまず心を奪われた。さらに、ユダと桃花のアンビバレントな葛藤が重なり合い共鳴する。音楽もショパンのプレリュードから始まり終盤のハレルヤ、ユーロビート、ねぶたビートが一気に舞台を盛り上げラストに向かう。照明も無色を通して最後の赤色が強烈な印象を残す。脚本、演出、演技のどれもこれもこれが私の想像を超えていた。原作の熱量に負けない生徒たちの熱い演技にも拍手。

## 兵庫県立東播工業高等学校 『廻る』

ラストのシーン以外の6シーンは観覧車の中で演じられ、小学校卒業時から高校卒業までの6年が一年ごとのシーンになっている。またそれぞれのシーンが、観覧車が一回転するのとリンクしているのもしゃれている。このユニークな構想は狭い空間で人数も動きも限定されるので繊細で密度の濃い会話を描くには好都合だがリスクもある。思春期の男同士の不器用だが意外に繊細な会話が彼らのその時点での迷いや葛藤や希望を浮き彫りにして戯曲がうまい。ルービックキューブやエロゲーなどの小道具の使い方も楽しかった。

## 目黒日本大学中学校高等学校

### 『ごめんね、ごめん!』

観終わってからも萩本の姿はいつまでも心に残った。1990年代から現在までの日々を10年ごとに区切り、その年代の社会状況を織り込みながら変化する生徒たちと懸命に向かい合う萩本の姿を描く構想が効果を発揮した。手を焼かせたが後に教師になった男子生徒の死、生徒となって現れたその娘にかけてあげられなかった一言への悔恨などのエピソードが萩本の人柄を印象付けた。同僚との軽妙なやり取りもうまい。いじめの描き方も生徒との共作ゆえであろう当事者の心理に迫っていた。萩本を演じた一年生の奮闘を称えたい。

## 徳島県立城東高等学校 『その50分』

手前に廊下、奥に扉と曇りガラスで遮られた教室そして外の世界という三層構造が作品世界の奥ゆきと広がりを感じさせた。驚くべき構想と緊密に組み立てられた暗喩と鍛えられた演技が圧巻の舞台を実現した。教室と廊下でせめぎ合った50分が終わり一気に殺戮のシーンに。危機は気付かぬ間に忍び寄り、気付いた時はもはや手遅れ。外の世界で何が進行していたのか暗示して余りある銃撃音が衝撃だった。アイリンが見た世界は…、生徒たちが飛び出して行った劇場の外の世界は…見終わった後も考えさせられた。

## 東京都立千早高等学校 『ちんぷんかんぷんぷん』

日常から多数のシーンを切り取ってドラマを構成するこのスタイルは「言うは易(やす)し」だが簡単ではない。ここまで完成させた努力と力量は半端ではない。高校生の実像を活写しかつエンターテインメントにまで仕上げている見事である。生徒たちは創造のプロセスを通して自己を社会を客観視する眼を獲得したことだろう。スタイルは変わらなくとも新たなメンバーでさらに視野を広め深めてまた新たなドラマが誕生した。

(静岡理工科大学星陵中学校・高等学校演劇部顧問)

## 演劇のさらなる可能性を教えてくれた 上演校に感謝!



石田 千晶

さすが全国大会! 脚本に目を通したときから、思わず吹き出し、涙溢れ、舞台でどう表現されるのだろうと胸が高鳴りました。そして迎えた全国大会。劇場の特性、バウンダリーマイクとのバランス、鑑賞する位置など様々な要因が影響するため対策が難しいのは重々承知しているものの、脚本を読んで作品の素晴らしさを知っている身としては、ここの台詞がもっと届けば…と悔しく思う瞬間もありました。

そんな中でもどの作品も私の期待を遥かに超えて、生き生きと立ち上がっていました。これぞ、演劇! 恐ろしいほどの静寂の美しさ、同時多発の会話の破壊力、次々に繰り出す魔法のような演出など、私の演劇観をぶち壊し、演劇の可能性を見せつけてくれた作品もあって痺れました。演劇は観るものにとどまらない、体験するものだと思感しました。

私個人は物語性の強い心にしみるヒューマンドラマが好きなのですが、審査にあたって、自分の嗜好を離れて、様々なジャンルから、もう一度観たい、多くの方に観てもらって語り合いたいとより強く思う作品を選びました。どれが選ばれてもおかしくない凄い全国大会に立ち会えたことを心から感謝しています。

## 鹿児島県立伊集院高等学校『仕事のお父ちゃん』

「ひっくり返すんや」と本気で対峙してくれるお好み焼き屋のお父ちゃんを描きたい!との強い思いが溢れた脚本を、鹿児島の高校生たちが関西弁で見事に演じた舞台でした。見立て舞台で、複数の役や様々な心境を立ち方の違いで表し、間や台詞のないやりとりも駆使し、お父ちゃん半生の瞬間、瞬間のドラマをテンポよく立ち上げました。

## 山口県立下関中等教育学校『レベル1の勇者』

自分たちだけで創り上げた自信に溢れた上演でした。生徒創作の台詞も刺さります。「『はい』しか選べない…死以外のエンドなし」「子どもにはなあ、わがままっていう必殺技があるんや」大人の都合で振り回される理不尽に挑もうとする子たちを想って涙が零れました。全国の高校演劇の仲間を勇気づける、勇者の名に相応しい作品です。

**北海道帯広三条高等学校『つぶあんとチーズ』**

地元育ちの陽気な桃花と寡黙な転校生夏美が、学校祭の会計で硬貨や食券を数えるうち、距離が縮まり、立場が逆転します。初めて友人を見送る側になる夏美の思いに胸が熱くなりました。演者も装置もリアリティを追求し、間を駆使し、おやきを食べながら小豆農家の夏美一家の離農がさらっと語られるなど仕掛けが巧みで心にしみる作品でした。

**岐阜県立長良高等学校『星観る者ども』**

中世の地動説・昭和の服飾・現代の演劇部のスターを支える者を描く脚本は難解でしたが、上演は目の離せない仕掛けの連続で、旅行鞆が列車になり、影から突然人が浮かび上がり、驚きと目撃する歓びに満ちた舞台でした。テンポよく3時代が交錯する中、演者は人物像を濃く演じ、演出が光と影を鮮烈に表現し、主題を補強していました。

**高田高等学校『色々々々々々々々』**

多様性の象徴、虹を表す7個の色。詳細を省いて「察して!」と言うときの色々。色をモチーフに展開するセンスに脱帽です。「弱い者は見えへんもの、見えへんものは、ないのと一緒」という言葉が刺さりました。他者に対して不寛容なモモと色々抱えた周囲の人たちを描くことで多様性を問うた作品で、「謳い文句としての多様性」へのアンチテーゼでした。

**宮崎県立宮崎南高等学校『学校の片隅で、数式を叫ぶ』**

大きな声の出せなくなった教師を演劇部員が発声練習や模擬授業で救います。先生の背中を曲げて囁く声に観客が一齐に前に乗り出しました。教室を出た途端すらっと伸びる先生の立ち姿の魅力に釘付けになりました。先生自身が見事な仕掛けでした。変わっていく先生と元気な演劇部員の愛に溢れた補講を覗き見て幸せな気持ちになりました。

**千葉県立松戸高等学校『私たちの、小さな物語』**

人物が際立つ演技、盤石なスタッフワークで、将来に悩み、生徒に翻弄される教育実習生を描きました。教員志望者が激減する昨今、実習生たちの本音が刺さります。寄り添って共に考えてくれるウルトラティーチャーのくだりにほのぼのしました。悩める怪獣、外れる黒板、飛び出す人、人形劇。エンタメ満載の演出はホールを幸せで包みました。

**青森県立青森中央高等学校『駈込み訴え』**

原作はユダのイエスへの歪んだ愛情を描いたものですが、この作品のユダ役、演出助手モモカはまっすぐで働き者。イエスのコスズは美しく、底意地悪

い演出。役者は無理だと雑用に走るモモカに、コスズが「好きなんですよ?」「役者やらない?」と艶かしく感わします。役を奪うモリが紙吹雪をぶちまけるシーンの異様さも、原作を超えて、完全に心を持っていかれました。削ぎ落とされた演出は鋭く、紙吹雪舞う十字架が頭から離れません。

**兵庫県立東播工業高等学校『廻る』**

観覧車内の会話だけで綴られる魅力的な作品です。少年時代のやり取りは決して効力を失わず、自分にもさらに離れた友達の友達にも、少しずつ影響を与えていく様が水面の波紋のようで心地よく、男子のぶっきらぼうな会話を楽しみました。一つのドラマがゴンドラで、オムニバス全体で観覧車を構成しているようにも思えました。もう一度間近で観たい作品です。

**目黒日本大学中学校高等学校『ごめんね、ごめん!』**

主人公の教師生活30年を描いた大作で、時間経過をセットを回して表すなど演出もパワフルでした。「人生は向かい風」「人生に伏線回収も答え合わせもない。ただがむしゃらに生きて生きて、その過程そのものがドラマなんだ」心に残る名言でした。教師は思い出に支えられ頑張る仕事だと実感し、最後のダンスに心震え、涙が溢れました。

**徳島県立城東高等学校『その50分』**

演者が生き生きと生きる50分。その後10分に凍り付き、自分も逃げ出したい衝動に駆られました。対立や衝突はあっても未来が奪われることなどないと思いたい自分に気づきます。突然理不尽に日常が奪われたウクライナやガザは私たちと地続きの世界なのに。細部まで丁寧に構築されたリアリティと強烈なアクチュアリティが、観客に大きな衝撃を体験させ、深い思考に導く、演劇の力を痛烈に感じさせる作品でした。

**東京都立千早高等学校『ちんぷんかんぷんぷん』**

2020年春フェスから千早作品を興味深く見てきました。リアルな呟きのまとめ方が秀逸です。個々の思いが音楽とミザンスの工夫を伴って纏まった一つの演劇になります。露悪的な呟きに戸惑い、「お前らが勝手に環境作ってるくせにお前たち弱者だねとか言われるのおかしくない?」なんてきらりと光る発言に「いいね!」と呟きたくなりました。

(山口県高等学校文化連盟演劇専門部理事長  
山口県高等学校演劇協議会事務局長  
山口県立光高等学校教諭・演劇部顧問)



この講習では、状況と登場人物の関係性に応じてリアリティーのある場面を作り上げる力を作るために、ウォーミングアップのあとに場面づくりを行いました。以下に概要を紹介します。

### ① ワン・ツー・スリーゲーム

ペアになり簡単な自己紹介のあとでじゃんけんで順番を決め、向かい合ってお互いの目を見ながらワン・ツー・スリーを一つずつ交替で言う。途中で間違えたら二人でイエー

イ!と両手を挙げる。これを間を開けずに続けていく。次にスリーの代わりに手をたたき、さらにワンの代わりにドンと床を踏み鳴らす、といった形で負荷を増やしていく。これを通してペアの相手とミスを共有し、イエーイ!とはしゃぐことでミスを恐れなくなることができる。

### ② 「誰が言った」ゲーム

「誰が言った」という言葉のあとに出された指示通りに動く、というゲーム。ぐるぐる歩き回って目があった人と会釈する、といったシンプルなものから始まり、ペアを作りじゃんけんをして勝ち負けのリアクションをするなどの動きを入れたあと、雪玉を作って投げ合ったり焚火にあたったり焼き芋を取り出しておいを感じながら味わい感想を言ったり、熱い砂浜を歩き波打ち際で足を浸しお互いに水をかけあう、などの五感をフルに活用するような指示が出される。時折「誰が言った」というキーワードを伴わずに指示が出るので、参加者はしっかり指示の言葉を聞かなければならない。これを通してイメージの大切さを理解することができる。「イメージすると体の動きが変わる。聞くことに集中し、イメージして、その中で役者が自分の感じたことをベースに動く」とリアルに見える。ただ形を作るのではなく、イメージをちゃんと持つことが大切である。また、演劇は日常のリアリズムをベースにしているので常識を知ることが大切である」というアドバイスをいただいた。

### ③ 状況と関係性を考えるワークショップ

参加者に『おはよう』で始まる簡単な二人のやり取りが書かれたプリントを配布し、最初のワン・ツー・スリーゲームの時のペアでまず味わうように読む。次に図書館の中や工事現場など場所の設定を変えたり、喜怒哀楽の感情を変えたりしながら読む。次に全体をA・B・Cの3グループに分け、それぞれのグループに異なった状況と二人の関係性の書かれたプリントが配られ、10分間場面づくりを練習する。その後各グループから1ペアずつ代表で場面を演じ、他のグループのメンバーでその状況や二人の関係性を考えた。すべては伝わらなかったが、かなりの部分までみている人に伝えられることが分かった。



講習の概要は以上です。この中で参加者たちは状況や関係性は言葉がなくても伝えられることを学び、イメージをもって役者がセリフを膨らませることで伝わりやすくなることを身をもって感じることができました。そして、演出家の役割は表に出ないシチュエーションを役者がイメージしやすいように膨らませることであることを深く理解することができました。

(文責 岐阜県立中津高等学校 若森 明)

## 第2分科会 イマジネーション、コミュニケーション、表現力

講師 瀬戸口 郁

瀬戸口先生はまず、演劇にとって大切な三つのものについてお話をされた。一つ目はイマジネーション、想像力。二つ目はコミュニケーション、一緒に演劇を作る仲間と話し合い、互いに納得できるポイントを探すこと。三つ目は表現力、客席の一番後ろのお客様にも感動してお帰りいただけるように。中でも一番大切なのはコミュニケーションだ。説得力のある世界にするためには、仲間とのイメージ共有が欠かせない。そして、実際にそれを体感するインプロが始まった。

## ① ウォーミングアップ

参加者全員が部屋の中を歩く。できるだけ大きく、ゆったりと。歩きながら指示に従う。慣れたところで、指示と動作を入れ替える。「ストップ」→ジャンプ、「ジャンプ」→ストップ、「床」→手を叩く、「拍手」→床をタッチ。戸惑う生徒たちに瀬戸口先生は「考えない!反射で!」と声をかける。

次は、歩きながら指示された通りの仲間を集めて、成立したら座る。自分が何者なのかを発信する、あるいはキャッチするトレーニングだ。

## ② 手裏剣回し

20人程度で大きな円になって、想像上の手裏剣を回す。「はい!」と言って手裏剣を投げ、隣の人は素早く挟んでキャッチ。これを一秒でも早く、キャッチと渡す動作をひとつにして、マックススピードで3周。最初の人「いきます!」と言うと、みんな「はい!」と返事をして構える。素早くできると楽しいし、何もないのにドキドキする。見ていた生徒から自然と拍手が起こる。これはイマジネーションを共有するゲーム。みんなが身と心を集中させると、見ていてひとつのエンターテイメントになる。

## ③ 運転

できるだけ知らない人と二人一組になり、パートナーと前後に並ぶ。前の人が車、後ろの人がドライバー。絶対に他の人とぶつからないように、上手に運転する。

〈運転方法〉相手の背中を押す。押された分だけ進む。車の人は勝手に動かない。止まりたいときは両肩。曲がりたいときは、肩の角度を変える。周りをよく見ながら、車の人が迷わないようにしっかり指示を出す。周りをよく見て、安全運転。

二回目は、車の人は目をつぶる。車の人は腕の力を抜き、楽な状態で。

これは、相手役との信頼関係を結ぶゲーム。生徒からは目をつぶると車役もドライバー役も、「感覚が研ぎ澄まされた」という感想があがった。目に見えない豊かなものが、どれだけあるか。板の上では嘘は通用しない。一番いい状態を稽古場でつくる。目を閉じると当然怖い。だから車役の子は、最初はどうしても体がこわばる。しかしドライバーが安全運転をすればするほど、身体力が抜ける。安心できる。舞台の上でもまっすぐ楽に立つのが大事だけれど、時間がかかる。心は、身体に全部表れる。

## ④ ディベート

椅子を3脚ずつ向かい合わせ、お題に対して推進派vs反対派で、相手の意見を変えるように説得する。制限時間3分で、残り1分になったら、ヒートアップさせる。最後は見ている人でどちらが勝ったか判定。

当日のお題は、「カップラーメン」「夏休み」「クリスマス」。議論は白熱し、観客からは笑いが起こる。

これは皆が「面白い」とは何かを考えるきっかけになった。エネルギーがあると、でたらめでも面白い。

瀬戸口先生の語り口も相まって、演劇の面白さを改めて感じる充実した講習であった。



(文責 岐阜県立大垣西高等学校 松岡 菜津)

## 第3分科会 「ことばとからだのレッスン」

講師 越光 照文

## ●ゆで卵と生卵

俳優は監督や演出の指示に従って動き演技をする。しかし、ただ指示に従うのではなく、頭(こころ)とからだを自由にして柔軟性を持って役作りをすることが大切である。

今回は、からだと頭(こころ)から発する音を使った表現トレーニングをおこなった。

## ●フィクションと現実(フィクションをからだで表現)

講習会の前半は大縄飛びでからだを使うトレーニングをした。最初は全員で大縄跳びをする。次に回転している縄に入り、跳んでから外へ出る通り抜け大縄飛びの練習をする。しばらくして慣れたところで、縄をなくした「フィクション」の世界で大縄跳びに挑戦する。「演技」を試みるが、うまくいかない参加者もいる。これには自覚しているものもいるが、観客目線で見ると、実際に縄があったとして、「飛べた」か「飛べなかった」がよくわかる。再度縄の存在を想像して目の視界に意識を集中してやってみると、縄が存在するかのように見えてくる。中には縄に入る前に躊躇して足踏みする者や、跳んだ後に頭を縄から避けるような仕草をする者もいて、現実感を伴う「フィクション」を体で表現することができるようになった。また、それを見る周囲も歓声を上げたり、残念そうなため息を出したりと全体で一体感を感じることができた。

## ●ことばとところ(指示表出と自己表出)

「自己表出」というのは「あーっ!」とか「うっ!」とか、体内から出てくる音のような声。言葉として意味を持っている音ではなく、そのとき体内に溜まっていたものが凝縮されて音になる。

また、名詞などは機能をもとにした価値を持つ言葉であり「指示表出」である。例えば、「茶碗」という言葉は辞書に書いてあって、そのものは何かみんなが理解している。

越光先生曰く、自己表出と指示表出の交差するところに芸術がある。「指示表出」だけでも台詞はできあがるが、「自己表出」の部分がないとお芝居には現実味がでないし、感動も生まれないとおっしゃった。

後半は「自己表出」を意識して、声を発することで、自分の思いを相手に伝えるトレーニングをおこなった。体験者は4人で1グループとなる。3人が等間隔で立ち、残りの1人はその3人の5m後ろに立ち、そのうちの1人に「おーい」と声をかける。等間隔に並んだ方は、「自分が声をかけられた」と感じたら、振り返って合図をする。「おーい」という「自己表出」の「音」に意識をのせて発し、他方はそれを感じて受け取るという練習である。発するのは「おーい」の声のみである。

慣れてくると通じるようになるものである。その後、距離を7m、10mと伸ばしたり等間隔でなくランダムにいる3人のうち1人を意識して声をかけるなど、難易度は工夫できる。

(文責 岐阜県立大垣西高等学校 松岡 菜津)

## 第4分科会 舞台技術創造講習会〈報告〉

今回の舞台技術創造講習会は、伊集院高等学校顧問の上田美和先生が書かれた脚本「きみのこえをさがして」を劇団あおきりみかんの鹿目由紀先生に演出していただいた作品を題材にしました。舞台美術を土岐研一先生、照明を乳原一美先生、多田貴弘先生、音響を藤田赤目先生、熊野大輔先生、舞台監督に吉木均先生、大道具制作協力と背景画講習を金井大道具株式会社さん、そして総合プロデュースと衣装制作を土屋茂昭先生というプロの講師陣により高校生を指導していただいた舞台制作の熱い5日間になりました。



## ○事前講習会：7月29日(月)～8月1日(木)

道具班はまず土岐先生の模型を使つての舞台装置の説明から始まり、4人1組に分かれて吉木先生から大道具のメインとなる柱の作り方を、金井大道具さんから柱の色の塗り方を指導していただきながら大道具作りの手順とコツを学んでいきました。照明班は乳原先生から照明機材を目的に合わせてどのように使っていくかを、音響班は舞台における「音の種類と役割」について講義していただき音響機材の使い方を、衣装班は身近な気泡緩衝材を利用した衣装作りを学びました。アンサンブルを含むキャスト班は鹿目先生から台本の意図を把握して舞台上でどのように表現していくかを役者が考える演出をしていただきました。どの班も演劇についての知識や技術を教えるだけではなく、参加した生徒が舞台づくりの楽しさを感じ、どう作っていくかを考えさせる講習となりました。講習の中で起きた失敗から「どうして失敗してしまったのか」「その失敗をどう修正していったらいいのか」など「失敗から何を学べるのか」を生徒に考えさせる場面があり、本当に実践的で、まさに舞台を「想像」して「創造」する経験が生徒はできたと思います。

## ○講習会当日：8月2日(金)

当日は会場のみぎくホール(客席数380)がほぼ満席となる盛況ぶりでした。講師紹介の後、素バージョンと音響・照明・衣装・小道具を全て加えたフルバージョンの上演があり、それぞれのパートが近未来的な背景と登場人物の心情を表現するためどのような工夫をしたかについて説明していただいた後、舞台美術家の佐々波



雅子先生を交えての座談会があり、バックステージツアーありと大変盛り上がり、演劇作りを存分に味わうことのできた2時間になりました。協力いただいた講師の先生方、全国高演協の方、岐阜の顧問の先生方ありがとうございました。

(文責 各務原西高等学校 大野 広行)

## 第5分科会 生徒講評委員会合評会 「多様性と多面性」

生徒講評委員会は、高校生の作品を同じ高校生の視点で真正面から受け止めることを目的としている。演劇の専門性のみならず、生徒たちは「共感性」や「主題性」を中心に議論を進めてきた。合評会では、劇を真正面から受け止めた様々な立場の高校生たちが熱い議論を繰り広げた。数十人の参加生徒は、住む場所も生い立ちも当然違い、趣味嗜好、考え方も異なる。その上で、舞台の多種多様な受け止め方を対話で深め、あるいは変質させる。人の意見や感じ方に耳を傾け、自身の意見を論じる末に、一つの作品が実に多様な魅力をもつことに改めて気づかされ、一人一人の中でさらに深く大きな意味をもっていく様子があった。演劇の多面的な見方や捉え方の多様性が、全国屈指の秀作の価値をさらに高めていると感じた。

今回の合評会では、事前調査で「観劇できた学校」を参加者に聞き、3つのグループに分けた全員が観劇している上演をテーマに講評を進める方法を採用した。そのため、全上演校の講評ではなくグループの全員が観劇できている作品についてのみ語られたことを、おことわりしておきたい。

## 1. アイスブレイキング

合評会の前、参加生徒全員でアイスブレイキングが行われた。このあと真摯な対話が始まる上で、心の壁を取り払ってもらうためのものだ。ワークショップを終えた参加者の顔は、集まったばかりの時にあったよそよそしい他人顔ではなく、演劇仲間のそれになっていた。

## 2. グループ分け

十数人ずつ3つのグループに分け、その全員が観劇していることを前提にテーマとなる上演校が示された。グループは所属校や出身県ができるだけバラバラになるように編成され、価値観や知人同士の偏りを減らしてできるだけ多様な意見交流を求めた。グループ討議の司会はそれまでの数日間を講評委員会で過ごしてきた生徒講評委員が担い進める。

## 3. 合評会（あらすじや物語の内容は割愛し、出た意見の集約のみ掲載）

## G1.『レベル1の勇者』山口県立下関中等教育学校

共感性の高い作品だった。ゲームの世界観は身近で、現実世界の葛藤やコミュニケーションの中で起こる摩擦を「ダメージ」で示すことでイメージが具現化される。テーマは「選択」か。主人公と父の選択方法や経過の違いが人生の経験と自己の築いている価値観の違いに重なる。やり直しのきかない人生に挑む全員が「勇者」なのだ気づかされる。

## G2.『廻る』兵庫県立東播工業高等学校

タイトルが「回転」と「巡り合い」を示す。舞台中央に置かれた古びた観覧車のひと籠がノスタルジック。小学生から高校生の男子による軽快で無軌道な会話が後半の成長と哀愁に拍車をかける。時間と季節と人間が回って巡って変化する演出に感動した。女子高校生には理解しがたい意味不明男子小学生が、応援したい高校生へと育っていく様子に心打たれた。

## G3.『仕事のお父ちゃん』鹿児島県立伊集院高等学校

キーは「ひっくり返す」か。自身の人生を絶望から希望へひっくり返す。返るでなく返すところに強い意志を感じさせる。周りから見たら「諦めない努力人」に見えるが当人からすれば必死にしがみついているだけ、だからこそパワフルで苦悩にも血が通う。誰でももつ「お父ちゃん」が多様な描きで登場し、仕事のお父ちゃんが一番素敵に描かれる。根性と愛に溢れた素晴らしい作品。

（文責 岐阜県立岐阜農林高等学校 小澤 天平）

## 事務局通信

前年度の鹿児島大会で一巡目が終わり、新しい区切りの大会となった全国高等学校総合文化祭岐阜大会が、7月31日～8月2日の日程で、不二羽島文化センターで開催されました。今年度第1回常任理事会、理事会においては、まず2023年度事業報告、決算報告が行われましたが、決算報告で加盟校廃滅による収入減と、鹿児島大会舞台技術講習会の記録費支出、旅費の高止まりに伴う支出増が指摘されました。2024年度予算案では、会議費、記録費、春季全国大会補助費の圧縮、「演劇創造」1号分のデジタル化等の支出額の抑制を盛り込みました。春季大会でのプログラム販売等の意見もありましたが、会場減免、著作権の問題から、難しいと判断します。全国的に学校の統廃合が進み、加盟校数の減少が続くこと、協賛金に不確定要素が多く変動の可能性が避けられないことから、今後も財政状況の改善に取り組むことを目指していきます。

岐阜大会については、舞台床面全面についてリノリウム張りの対応が行われました。開催地スタッフの技術講習、資材運搬の件等、日本工学院サイドと調整しながら実施しましたが、舞台上の動き等に支障はなく、概ね好評でした。特に大きな問題点がなければ、次年度の大会以降も継続して導入したいと考えます。また、生徒講評委員に対して、その活動を評価する意味で、全員に表彰状を授与することとしました。今大会においても活発な討論が行われ、その様子は観客の皆さんと共有されていました。各地区でも、上演に加えて「観る視点」からの生徒の様々な取組に結びつけていくことを期待しています。

各ブロック、都道府県からの課題としては、「創作」の区分について、線引きの難しさが指摘されましたが、全国大会については、校内公演で上演し新たに大会に出す場合は「創作」とし、過去にコンクールで上演されたものについては「既成」とする、としますが、「細則」の線引きについては、事務局で持ち帰り、継続議題とします。関連して、AIを利用し、作品のヒントを得ながら作った作品の上演は「創作」に当たるのかという提起がありました。ChatGPTをはじめ生成AIの教育現場での使用については、一定のガイドラインはありますが、統一した見解は示されていないのが実情です。芸術の分野でも議論があり、今後十分に検討していく必要があります。

また、出場校参加資格の確認（広域通信制高校の扱い）、「外部指導届」の提出の徹底について、大会参加要項の確認と併わせて情報の共有が行われました。

年度末に向けては、日本芸術文化振興会助成に向けて書類手続き等が各ブロックで必要になります。ご多忙のところですが、ご協力をお願いいたします。春季全国大会は、バラの街・広島県福山市です。またお会いできることを楽しみにしております。

(全国事務局・三上 実)

## 2023年度 全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞					
収入の部					
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要	
基本収入	会費	1,900,000	1,860,000	1,000円×1860校分	
その他の収入	活動報告広告	750,000	565,000	「活動報告集」広告掲載料	
	寄付金	80,000	60,000	「演劇創造」広告掲載料等	
	芸文振より	2,000,000	2,000,000	芸文振からの助成金	
	高文連より	250,000	250,000	高文連より活動補助・旅費	
	利息	35	30	ゆうちょ銀行・みずほ銀行	
繰越金	前年度より	1,114,137	1,114,137	繰越金	
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院	
	協賛金	930,000	930,000	四国学院・桐朋芸術短大・NHK	
合計		10,024,172	9,779,167		
支出の部					
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要	
管理費	旅費・交通費	2,250,000	2,537,230	鹿児島・福島 事務局会議旅費等	
	会議費	80,000	80,000	臨時常任理事会開催費	
	通信費	90,000	49,840	切手、送料、ファクス等	
	印刷費	135,000	78,533	賞状、封筒等	
	消耗品費	2,000	20,116	文具、コピー等	
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等	
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等	
	雑費	40,000	59,070	zoom、謝礼等	
	事業費	会誌発行	750,000	1,069,200	演劇創造148・149号、発送費
		ブロック連絡費	6,000	6,260	各ブロックへの振込費用等
		活動報告発行	1,100,000	893,650	各都道府県活動報告集
渉外費	渉外費	50,000	0	全国大会関係・弔慰金	
加盟費	高文連加盟費	100,000	100,000		
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	芸文振からの助成金(各ブロックへ補助)	
	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)	
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(鹿児島、チラシ5万円各)	
	舞台技術講習会	500,000	639,935	舞台技術講習会補助	
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ	
	予備費		13,172	0	
合計		10,024,172	10,423,834	-644,667 (2024年度一般会計へ)	

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		989,433	989,433	前年度繰越金
合計		2,289,433	2,289,433	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	989,433	0	
合計		2,289,433	1,300,000	繰越 989,433 (2024年度特別会計へ)

## 2024年度 全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞					
収入の部					
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要	
基本収入	会費	1,860,000	3,700,000	2000円×1850校	
その他の収入	活動報告広告	65,000	700,000	「活動報告集」広告費	
	寄付金	60,000	60,000	「演劇創造」広告費	
	芸文振より	2,000,000	2,000,000	芸文振からの助成金	
	高文連より	250,000	200,000	運営費	
	利息	30	35	ゆうちょ銀行・みずほ銀行	
繰越金	前年度より	1,114,137	-644,667	前年度繰越金	
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院	
		930,000	930,000	四国学院・桐朋学園・NHK	
合計		9,779,167	9,945,368		
支出の部					
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要	
管理費	旅費・交通費(役員派遣費含)	2,537,230	2,500,000	岐阜・広島 事務局会議旅費等	
	会議費	80,000	0	臨時常任理事会開催費	
	通信費	49,840	70,000	切手、送料、ファクス等	
	印刷費	78,533	130,000	賞状、封筒等	
	消耗品費	20,116	20,000	文具、コピー等	
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等	
	記録費	20,000	0	脚本購入等	
	雑費	59,070	50,000	zoom、謝礼等	
	事業費	会誌発行	1,069,200	750,000	演劇創造150・151号、発送費
		ブロック連絡費	6,260	9,500	各ブロックへの振込費用等
		活動報告発行	893,650	700,000	各都道府県活動報告集
渉外費	渉外費	0	50,000	全国大会関係・弔慰金	
加盟費	高文連加盟費	100,000	100,000		
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	芸文文化振興会助成金(各ブロック25万円)	
	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)	
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(鹿児島、チラシ5万円各)	
	舞台技術講習会	639,935	400,000	舞台技術講習会補助	
	春季全国大会	300,000	300,000		
	予備費		-644,667	495,868	
合計		9,779,167	9,945,368		

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	200,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	100,000	
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		989,433	989,433	前年度繰越金
合計		2,289,433	2,289,433	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
運営費	出場校補助	300,000	0	出場校運搬費補助
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	989,433	989,433	
合計		2,289,433	1,989,433	

## お知らせ

47都道府県を回ってきた全国総文祭もいよいよ2周目に突入！記念すべき第70回岐阜大会の幕を無事に下ろすことができたのは、開催地の先生や生徒をはじめとするスタッフ皆様の綿密な準備のおかげです。皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

さて、大会と並行しておこなわれた理事会では、2023年度決算と2024年度予算案が審議され、可決承認されました。

私たちの日頃の活動を支えて下さっているのは、民間支援団体の皆様の協力があることです。特別協賛団体の東京工科大学 日本工学院をはじめ協賛団体の四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学などの各支援団体様に心から感謝を申しあげます。

また、9月28日(土)15:00~17:00 NHK Eテレにて「青春舞台」が放映されました。放送では、各校の活動や大会の様子、また最優秀校の上演が放送されました。